

秋田県文化財調査報告書第80集

藤木遺跡、内村遺跡、桐木田遺跡、
杉沢台遺跡、竹生遺跡発掘調査概報

1981・3

秋田県教育委員会

序

昭和55年度国営及び県営の農地造成事業に係る遺跡は5ヵ所あり、その調査を国庫補助を得て発掘調査を実施いたしました。その5遺跡の報告を一冊にまとめたのが本報告書であります。

能代市杉沢台遺跡では現在のところ、縄文時代の竪穴住居跡としては日本で一番大きいものが発見されましたし、内村遺跡からは縄文時代中期末の集落跡、竹生遺跡、藤木遺跡からは平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが発見されました。また桐木田遺跡からは中世末と思われる堀をもつ屋敷跡が発見され、各地で多大の成果を得て終了いたしました。

発掘調査は文化財を保護する側と開発側との協力と相互理解のもとにおこなわれるもので、その調査がスムーズに無事終了し、報告書としてまとめることができたのは関係者のご協力の賜と存じます。

最後に発掘調査から整理までご協力いただいた関係各位に対して心から感謝の意を表します。

昭和56年3月

秋田県教育委員会

教育長　島　山　芳　郎

目 次

I. 藤木遺跡	
第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第3章 発掘調査の概要	5
第4章 調査の記録	8
第5章 まとめ	12
II. 内村遺跡	
第1章 はじめに	23
第2章 遺跡の立地と環境	25
第3章 発掘調査の概要	27
第4章 調査の記録	32
第5章 まとめ	45
III. 桐木田遺跡	
第1章 はじめに	65
第2章 遺跡の立地と環境	67
第3章 発掘調査の概要	69
第4章 調査の記録	72
第5章 まとめ	77
IV. 杉沢台遺跡	
第1章 はじめに	92
第2章 遺跡の立地	93
第3章 発掘調査の概要	93
第4章 調査の記録	101
第5章 まとめ	102
V. 竹生遺跡	
第1章 はじめに	139
第2章 遺跡の立地と環境	139
第3章 調査の記録	139
第4章 まとめ	141

例　　言

1. 本調査報告書は昭和55年度、秋田県教育委員会が主体となって国庫補助を得て緊急発掘調査を実施した遺跡の調査概報である。

2. 本調査概報作成には下記のものが担当し、まとめたものである。

藤木遺跡、内村遺跡、桐木田遺跡

調査員　畠山憲司

補佐員　佐藤和弘

補助員　桑原　隆、三嶋隆儀

杉沢台遺跡、竹生遺跡

調査員　永瀬福男、熊谷太郎

補佐員　大高博康

補助員　佐々木金正

3. 本調査概報の全体編集は秋田県教育庁文化課があたった。

4. 本調査概報とは別に各遺跡ごとの本報告書が年度内に作成する。それとあわせて活用されたい。ただし桐木田遺跡は総合調査があり、本報は昭和56年度作成。

I . 藤木遺跡

第1章　はじめに

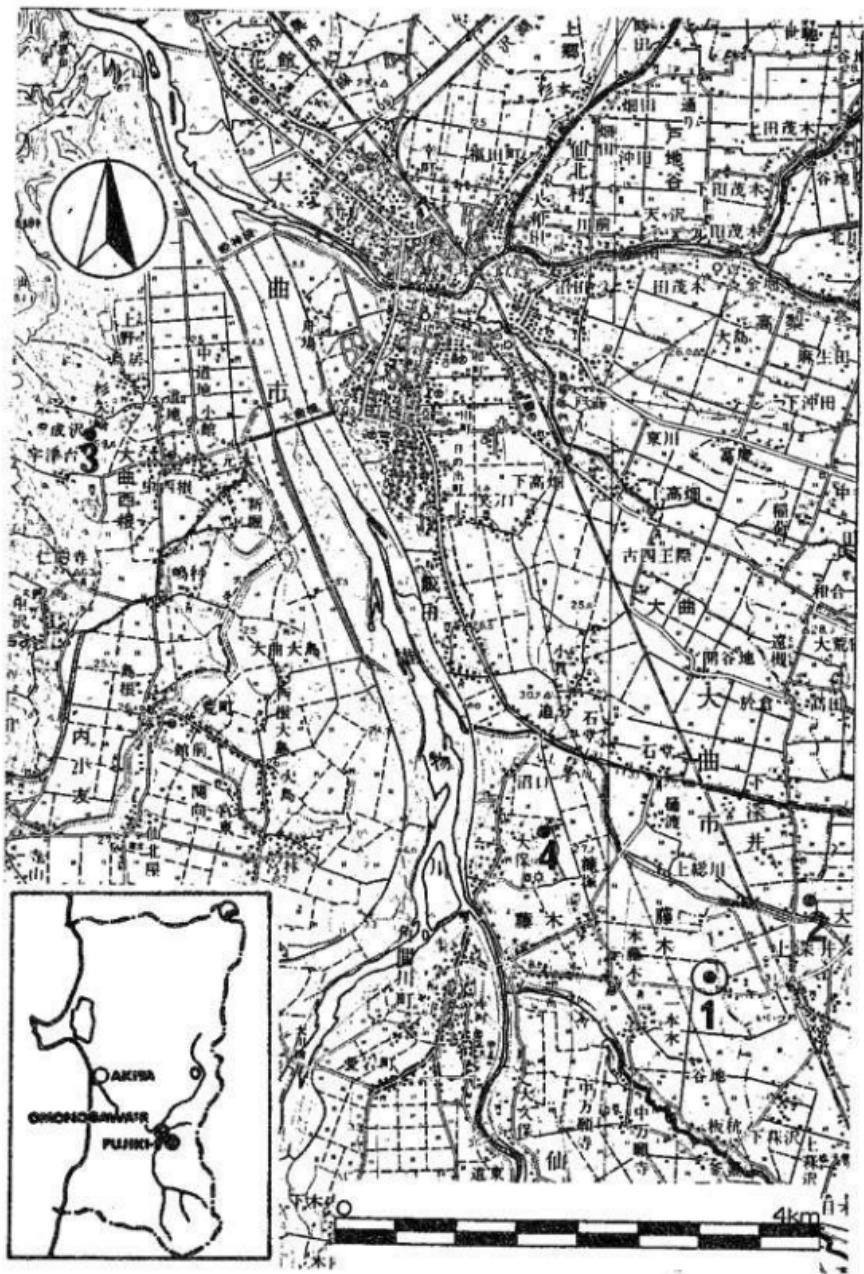
第1節　発掘調査に至るまで

大曲市に所在する藤木遺跡は、昭和37年の秋田県埋蔵文化財分布調査の際に登録された、いわゆる周知の遺跡である。この地域が昭和55年度より実施される県営ほ場整備事業地域内にはいるため、秋田県教育委員会が、昭和54年10月22日～24日、遺跡の性格及び範囲を確認する調査を行った。その結果、平安時代に属する土師器、須恵器等が多数発見された。

このため秋田県教育委員会は、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存をはかり、今後の資料に資するものとした。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	藤木遺跡
遺跡所在地	秋田県大曲市藤木字一本柳谷地
調査期間	昭和55年6月30日～7月23日
調査対象面積	1,200m ²
調査面積	1,400m ²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	畠山憲司（秋田県教育庁文化課）
調査補佐員	佐藤和弘
調査補助員	桑原隆、三嶋隆儀
事務補助員	齊藤知子
調査協力機関	秋田県仙北平野土地改良課 大曲市教育委員会



第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と環境

藤木遺跡は横手盆地の東北部中央、六郷扇状地の西部末端水田中に位置する。六郷扇状地の扇尖から扇端にかけては多くの湧水があり、縄文時代から中世にかけての遺跡が散見される。

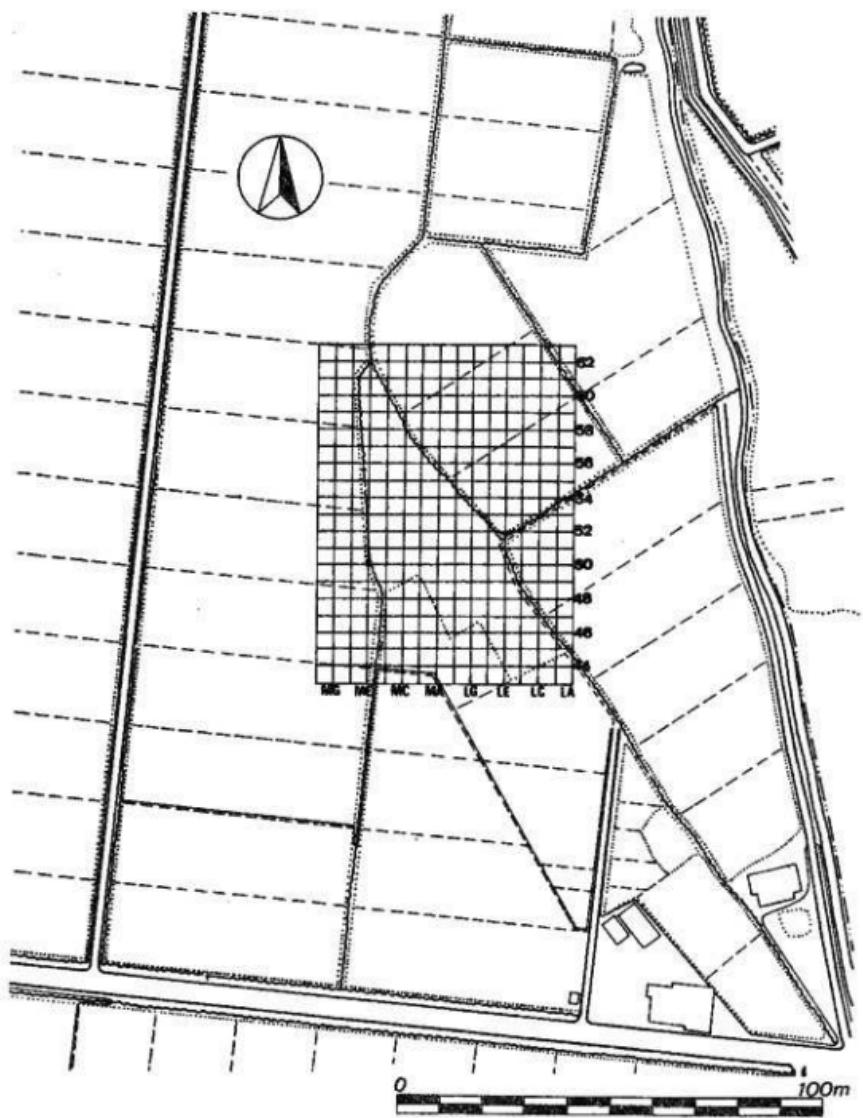
遺跡の周辺は全くの平坦面で、古くは部分的に谷地化した湿地もあったようで、「谷地中」、「千間谷地」、「背谷地」等の地名が残っている。遺跡の南西約1kmには六郷扇状地中央を通り西流する出川があり、西約2.3kmで雄物川に達する。

第2節 歴史的環境

藤木遺跡周辺は過去3回の耕地整理が行われし、いくつかの遺物が採集されている。これらの遺物に対してはいわゆる郷土史家などに若干の感心をいたしかけていた。秋田県史編纂主任長井金風氏が、大正元年10月10日付で藤木村高階秀和氏にあてた「藤木村発掘物調査書」によれば本遺跡から出土した土器類は、①(現在の)土師器、須恵器である②墨書き土器「伴」があり、大伴氏族の遺跡であろうか③糸切り底の土器がある④古墳と外堀が残っているのではないか、と述べている。

第3節 周辺遺跡

六郷扇状地及びその周囲には縄文時代から中世までの多くの遺跡が知られている。縄文時代では、東北2.2kmの石名館遺跡(晚期)、東3.4kmの小出遺跡(中期)など。古代では、東6.5kmの六郷扇状地扇頂部に位置する上中村、石森などの古墳群の他、北北東7kmには払田棚跡、北西7kmに成沢窯跡群がある。また、北東1kmにはほぼ同様な立地で、墨書き土器を多量に出土した藤木怒遺跡があり、本遺跡との関連が考えられる。中世の遺跡としては西2.5kmの四十二館跡等の中世館跡の他、東7kmの奥羽山脈西麓沿いに分布する板碑群、東北3.5kmの六郷町内にある板碑群がある。



第2図 造跡の周辺とグリッド配置図

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

1. 遺跡の層序

遺跡はかつての耕地整理等で大部分が破壊されており、わずかに残った1,200m²ほどの畑地を主な調査対象とした。この畑地での堆積土の層序は以下の通りである。

第1層 黒褐色耕作土（15~20cm）

第2層 暗褐色土（10~15cm）

第3層 黒色土（15~20cm）、遺物包含層

第4層 褐灰一褐色土（10cm）、漸移層

第5層 地山土、黄褐色粘質土

これに対し、この畑地の南側水田中では第1層耕作土、第2層暗褐色土の下はすぐに地山灰黄色粘質土であった。

2. 遺構の分布

今回の調査で検出された遺構は全てが畑地部分からのもので、掘立柱建物跡、井戸跡、土壙などである。掘立柱建物跡は調査区西側で、桁行方向を北西一南東にして縱に連なる形であり、井戸、土壙などはこれら建物群の東側に存在する。水田中からは遺構は全く検出されなかった。

3. 遺物の出土状況

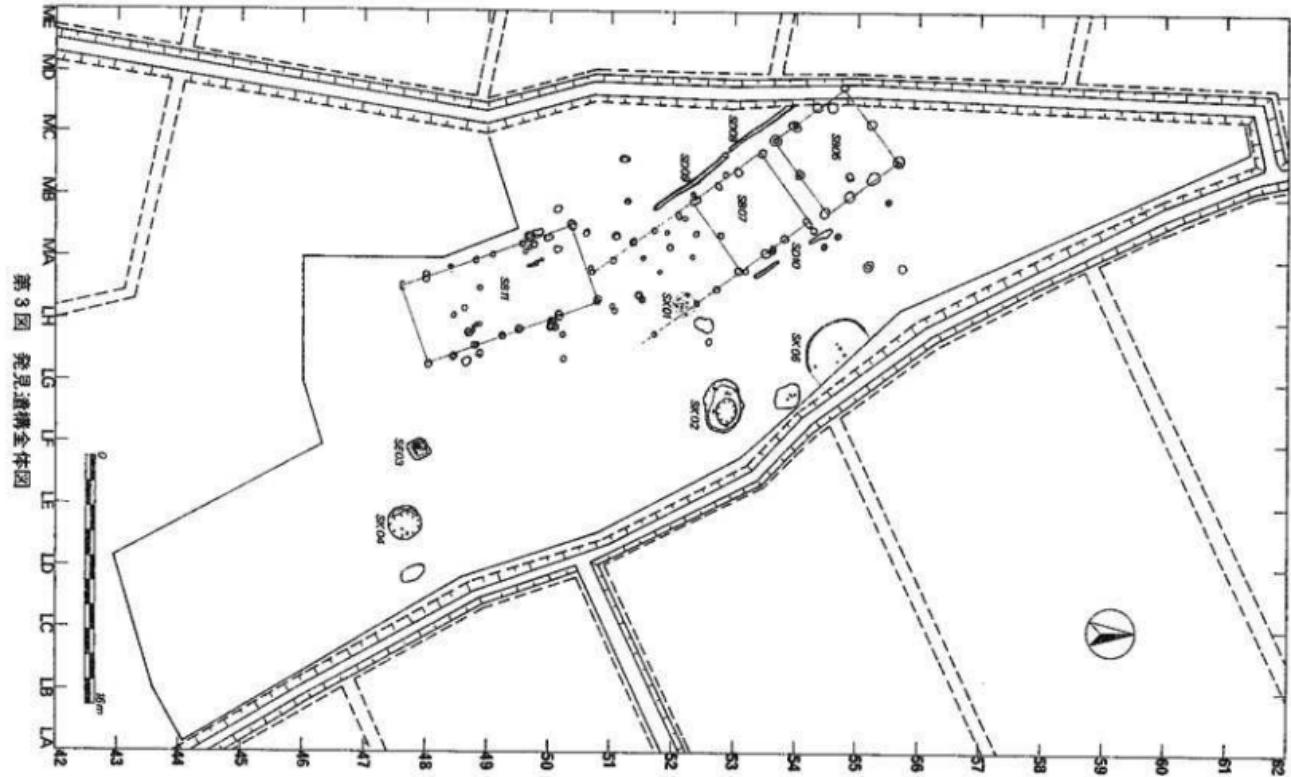
遺物の大部分は9世紀~10世紀の所産と考えられ須恵器、土師器でおおよその器形を推定し得るようなものは井戸、土壙から出土したものが多い。また、水田中からは数片を出土したのみであった。

第2節 調査の方法

発掘調査は4m×4mのグリッド方式で実施した。調査区のはば中央に任意の基準点を設置し、ここから磁北方向での東西南北基線を求め4m間隔での杭打ちを行った。東西にはアルファベット2文字の組み合わせ、南北には2桁の算用数字の組み合わせとし、各グリッドの名称は南東隅の交点のアルファベット、数字の組み合わせを用いた（MA50、LE46など）。

実測は原則として縮尺1/50とした。

遺構の名称は掘立柱建物跡=S B、井戸=S E、土壙=S Kとし、これに発見順に通し番号を付した。SK01、SK02、SE03、SK05、SB05などのごとくである。



第3節 調査経過

発掘調査は6月30日から7月23日まで実施した。

6月30日、現場作業の説明の後、早速表土剥ぎを開始。調査予定地は1,200m²ほど残った畠地の部分にしばり、土層の観察をしながら進めた。

7月2日、調査区中央部でSX01を検出。焼土の中に土師器、須恵器片が散在している。同日、SX01の東でSK02を検出。黒色土の落ち込みの中に火山灰と思われるサラサラした灰黄色土が円形に分布していた。9日、調査区南部で方1mの黒色土の落ち込みを検出、ポーリング探査して、井戸跡と判断した(SE03)。また同日、SE03の東側でSK02に似た落ち込みを検出(SK04)。須恵器のやや大きめの破片が見られた。11日、調査区北東部でこれまでの土壤よりは大きいSK06を検出。中央部に須恵器杯、壺などがバラバラに出土。この間、調査区の南西水田中を約200m²ほど地山直上まで調査したが、遺物はほとんどなく、遺構も全く確認できなかった。

土壤、井戸跡の調査などと併行して、第3層遺物包含層、第4層を掘り下げ、地山土上面で柱穴を追った。柱穴はほぼ一定の方向に連っており、およそ3棟の掘立柱建物跡を確認した(SB05, 07, 11)。

3日に1日くらいの降雨に見舞ながら土壤、井戸、柱穴の精査、実測、写真撮影などを行ない、7月23日、全ての調査を終了し、24日、発掘機械の搬出、25日、プレハブの解体を行った。最後の日も雨であった。

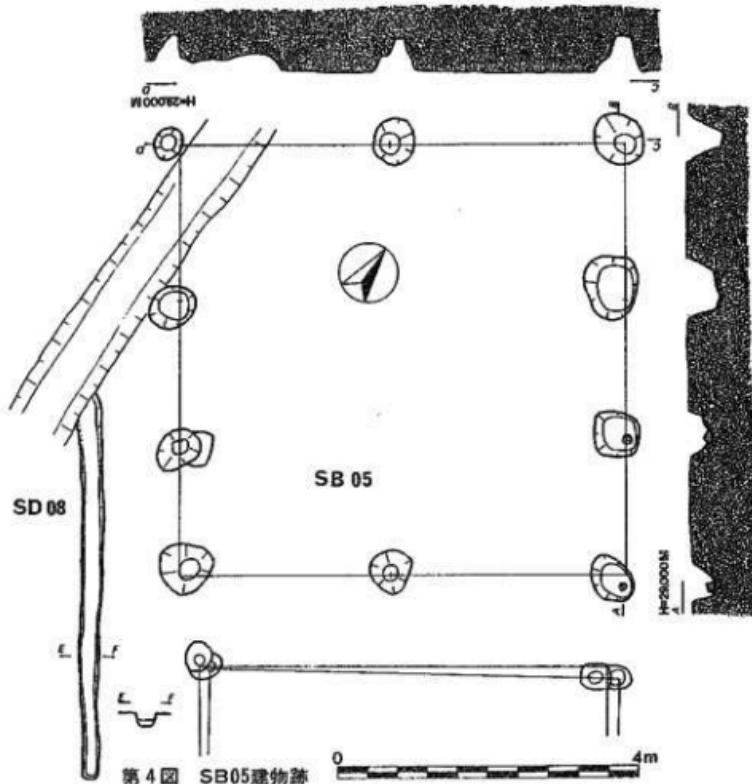
第4章 調査の記録

第1節 発見遺構と遺物

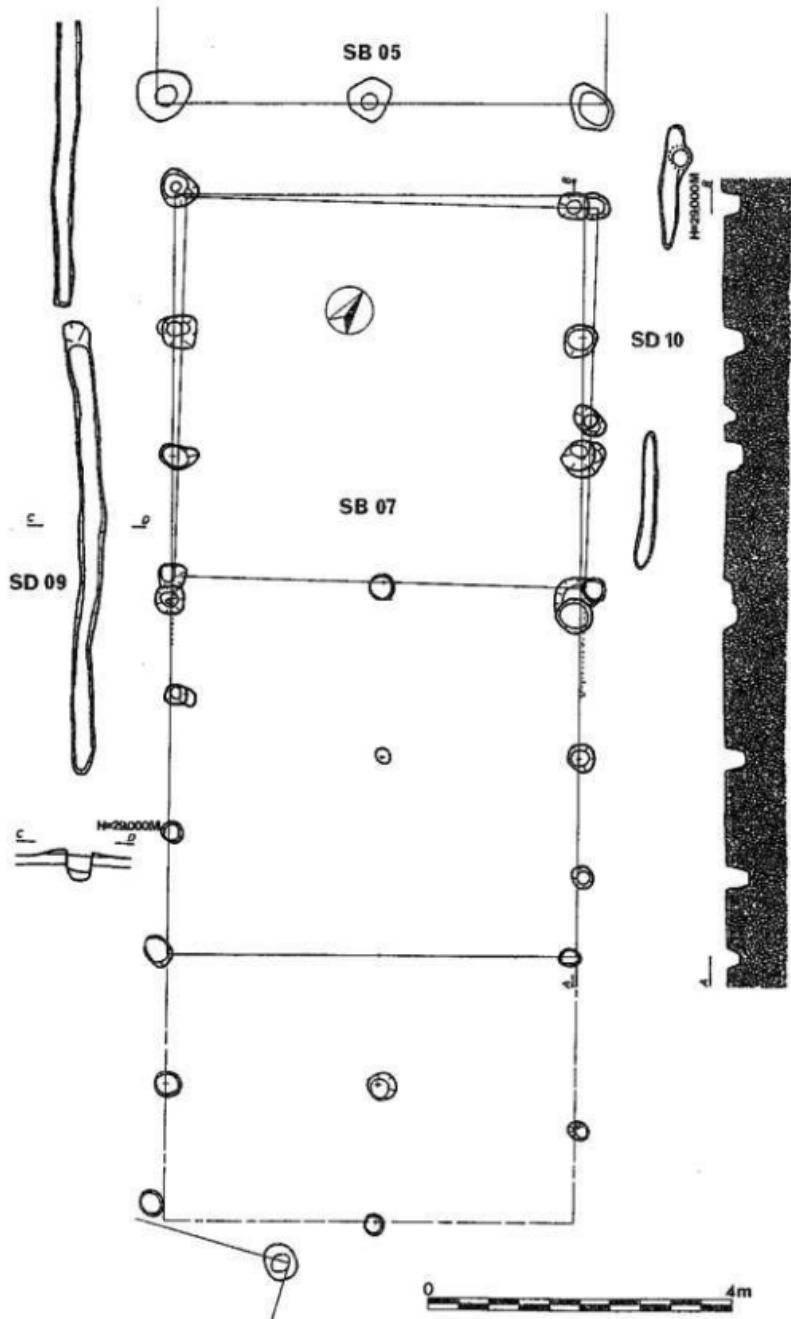
今回の藤木遺跡発掘調査で発見した遺構は掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、土壙2基、竪穴状遺構1基、溝状遺構4条である。柱掘方埋土中から平安時代中葉頃の土師器片などが出土している。ここではこのうち、掘立柱建物跡について報告する。

1. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はその桁行方向、並行する溝状遺構の存在などにより大きく2つに分かれる。



第4図 SB05建物跡



第5図 SB07建物跡

S B05, 振立柱建物跡（第4図、図版2）

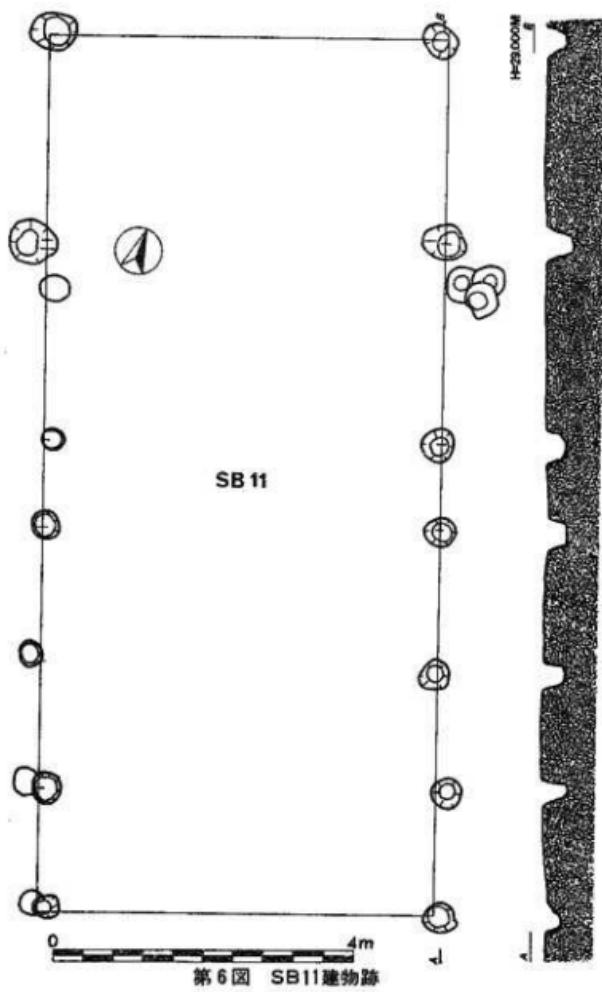
調査区北西部にある桁行3間×梁間2間の略方形の建物跡。桁行は総長574cmで南から178cm+187cm+209cm、1尺を31cm前後とする6尺等間である。梁間は総長591cmで東から311cm+280cm、10尺+9尺と思われる。柱掘方は確認面で径50cm~80cmの不整円形ないし略方形。深さは30~50cmで、底面に行くに従いせまくなる。柱根が2本残っていたが、径15cm前後で腐食によりやせていた。柱アタリ等からして径20cmくらいの丸柱に近いものであろう。桁行方向はN35.5°W。西側柱列の約1m外側に桁行方向に並行する溝状遺構（S D08）がある。S D12とも合わせて本建物跡に関連するものであろう。

S B07, 振立柱建物跡（第5図、図版2）

S B05の南に隣接して桁行方向をほぼ同じにする振立柱建物跡。東西の桁行側柱列が対応するのは北部分3間のみで、それより南は判然としない。あるいは第5図よりも桁行の少ない建物が構っているのかもしれない。北部柱掘方に若干の切り合があり、桁行3間×梁間2間程度の建物が重複している可能性もある。桁行側柱列の西約1mと東約0.8mに方向を同じにする溝状遺構 S D09とS D11、12がある。建物と関連あるものであろう。桁行方向はN36°W。

S B11, 振立柱建物跡（第6図、図版3）

S B07の南に隣接するが桁行方向が異なる振立柱建物跡。桁行6間11.70m×梁間1間5.24mの長方形。柱掘方は径30~40cmの円形で深さは約30cm。径15cm前後の柱アタリのわかるものもある。桁行方向はN20.5°W。



第5章 まとめ

今回の藤木遺跡の発掘調査では約2,400m²を調査した。その結果、掘立柱建物跡3棟、井戸1基、土壙2基、竪穴状造構1基、焼土造構1基の遺構と多数の遺物を発見した。これらの遺構と遺物について若干まとめてみたい。

1. 遺構について

(1) 掘立柱建物跡 明確な掘立柱建物跡は3棟である。このうちSB05とSB07は平行方向がN35.5°Wと、N36°Wでほとんど同方向であると考えてもよい。このことは2棟の掘立柱建物が同時に建てられたか、建物の方向に対する強い統一性が發揮された結果であると考えてよく、前者により妥当性があると思われる。2棟の建物の両側にあるSD08、09、10のあり方からもうなずけるところである。

また、SB07とSB11の建物の位置関係を見てみると、SB07が細長い建物であると仮定した場合、両者が同時存在することは考えられない。このこととSB11の平行方向がSB05、07とは異なることなどから、SB11と他の2棟の建物間に時期差があると考えられる。

3棟の建物は、たまたま畠地として残った部分で発見されたものである。未調査の水田部分（後世の耕地整理等で削平され、遺構として残ってはいないと思われる。）にもこれらの建物に連続するような建物が存在した可能性は十分に考えられるところである。

3棟の建物の時期は、柱掘方内から良好な遺物が出土しなかったこともあり即断できないところもあるが、周辺から出土している遺物に等しい時期と考えられる。

(2) 井戸跡 井戸跡は1基のみであった。しかし、県内ではこれまでこの時期の例はあまりなく、その構築方法と合わせて興味あるところである。SE03では隅柱を用いず、厚さ約5cm、幅20cm、長さ90～100cmの板を井桁状に組み合せ、板の端を井壁の粘質土につき差して固定するという工法がとられている。

(3) 土壙など 2基の土壙の性格は判らない。径2.2～2.4mの円形のものと、長径3.5m×短径2.6mの梢円形のものが発見されている。断面の形状は両者ともゆるい皿状を呈し、その底面近くには禾本科植物が炭化したと見られる層があった。また、埋土中には火山灰の堆積も見られた。何時頃降下したもので、どこから運ばれたものであろうか。

SK06竪穴状造構と、SX01焼土造構はともに竪穴住居跡とそのカマド（同一住居跡のものではない）とも考えられるが、どのようなものであったのだろうか。

2. 遺物について

須恵器と土師器が出土している。量的な比較では土師器が若干須恵器を上回る。

土師器では杯が圧倒的に多く、次に甕がある。この他に数量的には少ないが、口縁部が大きく外に折れ曲る皿や、内外面にタタキ目、アテ板痕、カキ目などのある鍋も出土している。また、県南の方ではあまり類例がなく、主に県北の館跡などから出土する底部に砂粒の付着したものもある。黒色処理された土師器はほとんどない。

須恵器では杯、蓋、壺、甕などが出土している。このうち杯では底部切離し技法に2種ある。底部の個数のみでこれを比較すると、回転ヘラ切離し25に対し、回転糸切離しは162である。

杯や高台付杯の底面などに墨書きのあるものが約40点ある。このうちの約8%は「伴」の墨書きである。「伴」以外で明確にわかるものは「田」1点である。



圖版1 上 遺構群全景（南►）

下 土層斷面（北►）



図版2 上 SB 05 掘立柱建物跡（南東▶）

下 SB 07 掘立柱建物跡（南東▶）

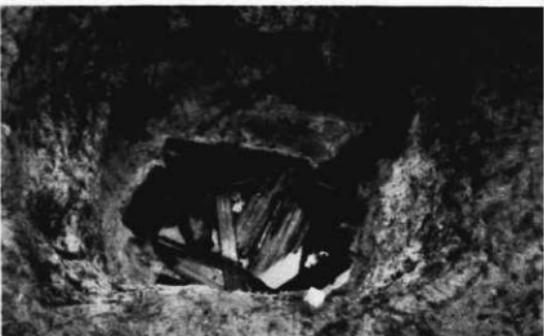
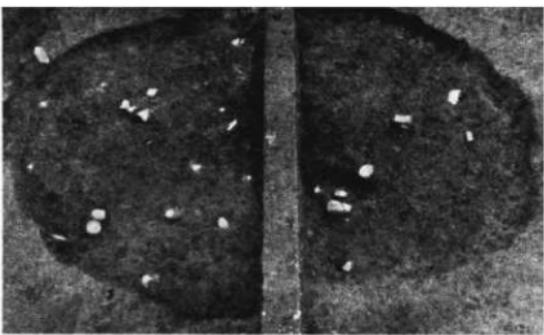


図版3 上 SE 03 井戸跡
下 SB 11 挖立柱建物跡（南東▶）

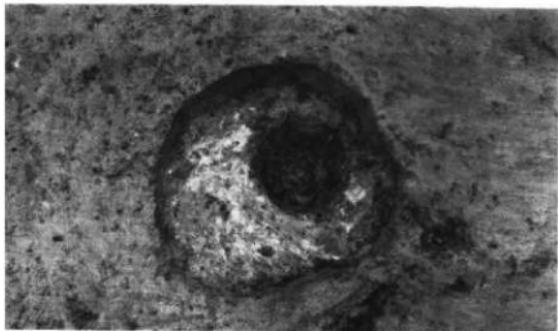
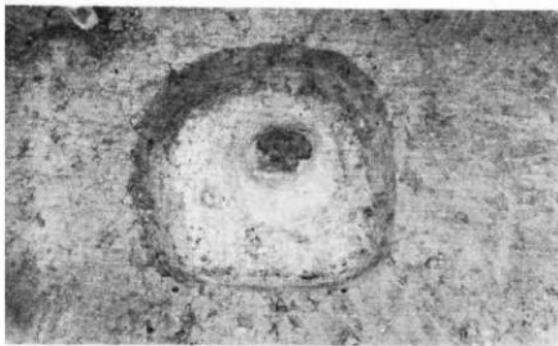
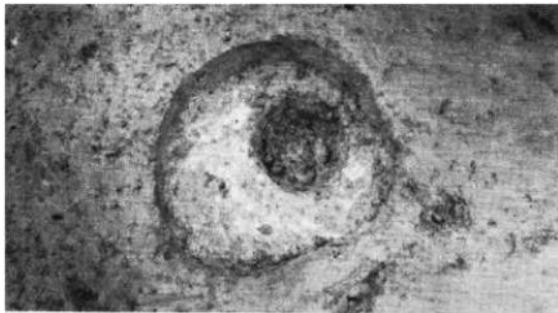


图版4 上 SK 06 竖穴状遗構（西►）

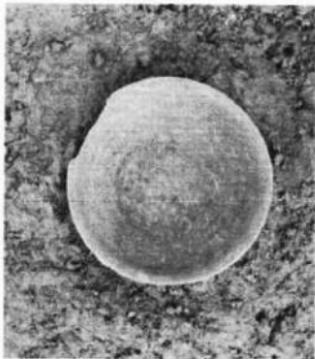
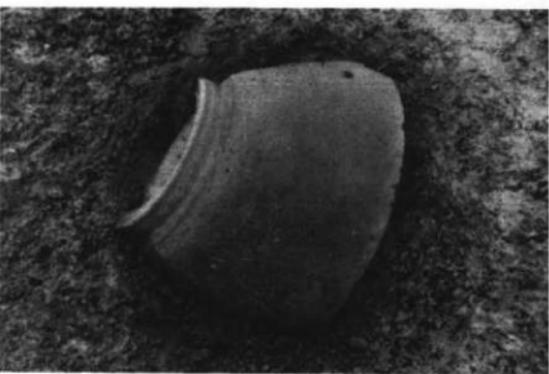
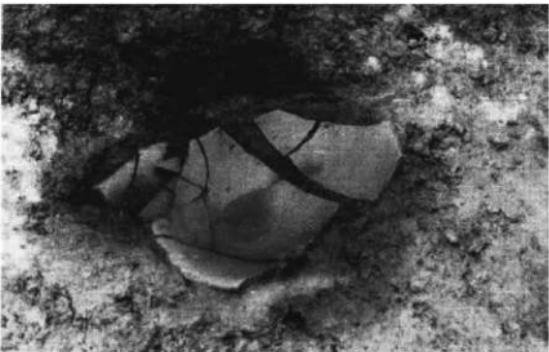
下 同上



図版5 上 SK 02 土壠
中 SE 03 井戸跡
下 SE 03 井戸跡



図版 6 柱穴完掘状況



圖版 7 遺物出土狀況

II. 内村遺跡

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

仙北郡千畠村に所在する内村遺跡は、昭和37年の秋田県埋蔵文化財分布調査の際に登録された、いわゆる周知の遺跡である。この地域が昭和54年度より実施される県営は場整備事業地域内にはいるため、秋田県教育委員会が主体となって、昭和53年10月9日～14日、遺跡の性格及び範囲を確認する調査を行った。その結果、破壊されている可能性が強いとされながらも、縄文時代中期後葉、及び平安時代後葉の多数の遺物を発見した。

このため、秋田県教育委員会では、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存をはかり、今後の資料に資するものとした。

第2節 調査の組織と構成

遺跡名	内村遺跡
遺跡所在地	秋田県仙北郡千畠村千屋字内村45
調査期間	昭和55年4月23日～6月24日
調査対象面積	2,000m ²
調査面積	2,400m ²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	嵐山憲司（秋田県教育庁文化課）
調査補佐員	佐藤和弘
調査補助員	桑原隆、三嶋隆儀
事務補助員	齊藤知子
調査協力機関	秋田県仙北平野土地改良課 千畠村教育委員会
発掘調査参加者	山村義美、高橋与四郎、佐藤虎之助、佐藤喜三郎、熊谷惣太、煙山昭哉、 高橋恭之助、加藤七之助、佐藤政之助、高橋修一郎、今川芳雄、須原文吉、 佐藤周之助、高橋勇、今川三歳、今川藤三郎、高橋源一、齊藤慎三、高橋 龍雄、煙山仁市、佐藤秀雄、高橋軍平、藤井辰男、富樫金榮、加藤ツル、 高橋ミヤノ、高橋サク子、藤井ユヨ、佐藤フジエ、佐藤トランエ子、高橋イ ネ、高橋フサ子、細井美保子、新田咲子、高橋リツ、高橋テツエ、高橋イ エ、水戸カツ、佐藤ナツ、今川シテ、坂本ミツヨ、煙山ヒサ、今川チヤ、

高橋ハツヨ、富塙ヒデ、戸沢キヨメ、藤井イエ
遺物整理協力者 杉原敬子、児玉久子、神居トシ、石黒紀子、高橋邦子、山崎節子、山木紀
子、高橋津真子、佐藤真智子、庄司礼子、柴田綾子、小川恵子



第1図 遺跡の位置

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と環境(第1・2図、図版1)

内村遺跡は横手盆地の北東部、国鉄奥羽本線大曲駅の東方約8.5kmに位置する。遺跡の東側には真登嶺(1059.9m)を中心とする奥羽山脈が南北に連なり、北～西～南には肥沃で広大な仙北平野が広がる。

奥羽山脈に源を発する丸子川、真尾川等の中小河川は山脈西麓にいくつかの扇状地を形成している。遺跡はそのようにして形成された六郷、一丈木両扇状地の中間にあり、前者の丸子川(旧荒川)、後者の釜淵川(小森川)にはさまれた微高地上に立地する。遺跡の標高は約50mで、

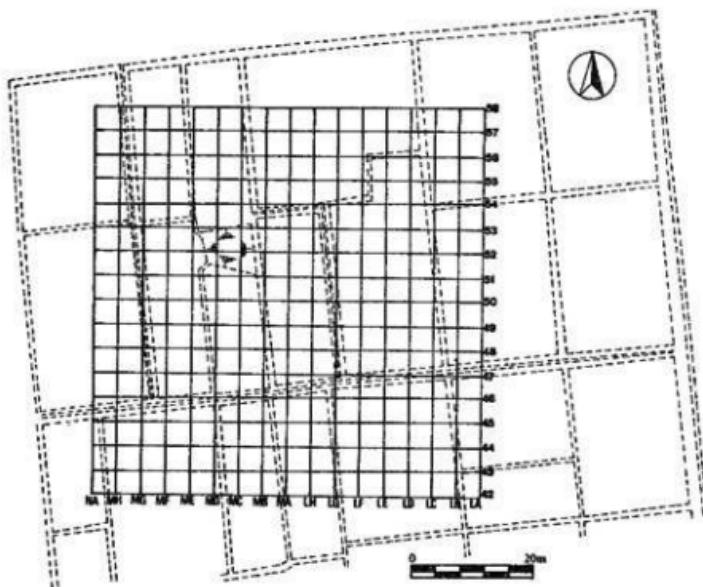


第2図 遺跡周辺の地形図

第2節 歴史的環境

内村遺跡のある仙北平野東部では、奥羽山脈から流れ出た水が急に平野部に達するため、良好な河成段丘の発達は見られない。このため、縄文時代から歴史時代の遺跡の立地は大きく2つに分けられる。1つは、脊陵山脈西麓にわずかに張り出したテラス状台地に立地する遺跡群で、主に縄文時代前期～中期中葉までのもの。他の1つは、山脈に近い扇状地末端部あるいは沖積地微高地上に立地する縄文時代中期後葉～歴史時代の遺跡群である。

内村遺跡は後者に属する。



第3図 グリット配置図

微高地であるため、かつては水がかかりが悪く、水田にすることが困難で土地所有者もこれをあきらめたという。しかし若者たちの集団である「消防団」が力まかせにこれを水田化したためこの水田に「消防田」という俗名が付されるようになったという。

第3節 周辺遺跡

第1図1が内村遺跡。遺跡の東側にある奥羽山脈西麓の台地には、1図3の一丈木遺跡をはじめ、縄文時代中期の組石群を持つ雲稼野遺跡や、中期、晩期に属する外川原Ⅰ、Ⅲ遺跡などがある。一丈木遺跡は昭和40～49年に4次にわたる発掘調査が行われ前期～後期にわたる遺物と中期全壇の竪穴住居跡が多数発見されている。刷状地末端に属する遺跡群は1図2の払田棚跡、4の中屋敷遺跡（縄文）、5の寺尾敷（縄文）などがあり、この他にも同様な立地で、多くの縄文時代後期～古代遺跡が分布しているようである。払田棚跡周辺には土師器、須恵器を出土する多くの古代の遺跡がある。

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

1. 遺跡の層序

内村遺跡は丸子川と釜淵川との合流点内側の沖積高地上に立地するため、氾濫原となつたこともしばしばのようで、いわゆる砂利が非常に多い。しかし、は場整備事業による排水路の土層観察によると、この砂利層の分布が遺跡周辺均一ではなく、むしろ、地山は黄褐色のやや硬い砂質土や青灰色粘質土である場合が多く、砂利層のほとんどない個所も見られた。発掘調査した部分の地層は概略以下の通りである。

第1層 黒褐色耕作土 (10~15cm)。

第2層 黒褐色砂礫土 (3~5cm)。強い黒色土で非常に硬くしまっており上部に径3~5cmの小礫があり、下部に縄文土器、土師器、須恵器の細片を多く含む。

第3層 暗褐色土 (10~15cm)。遺物 (縄文土器が主であるが、まれに平安時代のものも含む)、炭化物を含む。

第4層 暗褐色~黒褐色砂質土 (15~20cm)。漸移層でまれに縄文土器、炭化物を含む。

第5層 地山土。地山土は地点により異なり明黄褐色砂質土であったり、黄褐色砂利層であったりする。

2. 遺構の分布 (第4図)

今回の調査面積はわずか2,000m²強にすぎず、遺跡としての面積はこれ以上に広がっていることは確実である。

発見した遺構は大きく2時期に分けられる。1つは縄文時代中期のもので、竪穴住居跡、炉跡、土壙など。他の1つは平安時代後期の竪穴住居跡、土壙、焼土造構などである。

縄文時代の竪穴住居跡 (炉跡) 及び土壙は密接しており、いずれも強い関連を持っているものと考えられる。発掘調査した部分のみのこれら遺構群の分布状況を見ると、半径12~13mから半径40mの南東に開く半円の中にほとんどが入ってしまう。この小さな円の内側には遺構は少なく、この円上に径1~1.5m、深さ1m前後の袋状土壙が連なり、その外側に竪穴住居跡がめぐるように観取される。この遺構群が分布するところの地山は大部分が砂利、礫層である。

平安時代の遺構については、主に調査区中央から南東部分に集中していたが、工事途中の周辺の観察や、遺物の分布状況からすると、それほど濃密ではないにしてもおおよそ60,000m²前後の面積を持つ遺跡であったことが考えられる。

3. 遺物の出土状況

遺物はまず第2層下部の疊層中及びその下の第3層中から平安時代のもの縄文時代のものが小破片となって出土した。本来は、もっと上部に存在したものが、後世の耕作等で攪乱され、耕作土下に一緒に包含されたか、平安時代の遺構構築の際に縄文時代のものが振り返され混じり合ったかしたものであろう。縄文時代の遺物と平安時代の遺物を層位的に区別できる部分は包含層が浅いせいもあり多くなかったが、調査区北東部と南東部では、縄文時代の遺物が細片ながらもややまとまりを持って出土した。

平安時代の遺物で完形に近い土師器などはほとんど遺構に伴ったものだけである。

この他縄文時代では数軒の竪穴住居跡覆土中に多くの遺物が意識的に捨てられた状況で出土した。

第2節 調査の方法(第3図)

発掘調査は4m×4mのグリッド方式で実施した。調査区のはば中央に任意の基準点を設置し、ここから磁北方向での東西南北基線を求めて4m間隔での杭打ちを行った。東西にはアルファベット2文字の組み合わせ、南北には2桁の算用数字の組み合わせとし、各グリッドの名称は南東隅の交点のアルファベット、数字の組み合わせを用いた(MA50, LE46など)。

遺構の実測はグリッド杭のズレを手直しながら、これを基準に、原則として縮尺 $\frac{1}{50}$ で行ったが、複式炉等 $\frac{1}{50}$ のものも多い。

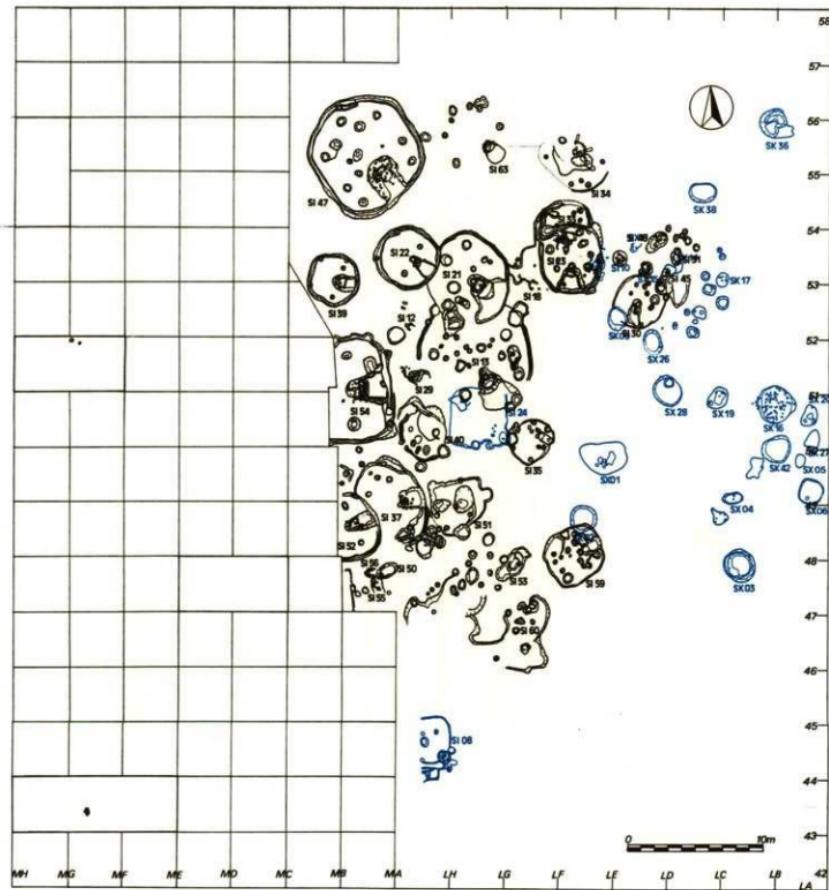
遺構の名称は竪穴住居跡=S I、土壙=S K、性格不明遺構=S Xとし、これに発見順に通し番号を付した。SK01, SK02, S I03, SK04, S I05……という具合である。

第3節 調査の経過

発掘調査は4月23日から6月25日まで実施した。

4月18日、調査に先立ち、調査区予定地の現況での測量とグリッド杭打ちを行ない、同22日、発掘機材の搬入を行った。

4月23日、調査区外側に幅1mのトレンチを3ヶ所に入れ、地層と出土遺物の状況を観察した。24日、調査区中央部より表土剥ぎを開始。第II層の疊層上下から土師器片、須恵器片等が時折縄文土器を伴って出土しはじめ、25日にはLE46グリッドから縄釉陶器片(高台付杯)も出土した。4月30日頃よりII層中ないしIII層上面で土師器を伴う焼土遺構及び、土壙の上面が現われ始めた。5月19日頃までに焼土遺構、土壙は合わせて10基を超え、調査区南東隅では、平安時代の竪穴住居跡(S I08)、東部中央ではSK16の土壙も確認された。この間現場では雨の日が多く、排水のための水路を掘ったが、これが結果的には第III層以下の断面観察をも兼ね



第4図 発見遺構全体図

ることとなつた。このことはまた、平安時代の遺構群の下に縄文時代の遺物包含層や遺構が存在することを知らしむることでもあった。

5月20日、調査区中央西部のII層を除去しきれいにしたところ、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡数軒のプランを確認した(SI13, 21, 22, 23など)。また、この面で小型の複式炉2基(SI12, 18)が検出されたが、プラン等は把握できなかった。このようにして本遺跡は縄文時代中期後葉の集落跡でもあることが判然としたため、調査期間等を考慮して、この時期の遺構の検出に努めることに主眼を置くこととし、平安時代の遺構等を実測、写真撮影し、その下を掘り下げた。

6月4日までにセクションベルト等も全てはずし、竪穴住居跡の検出を進めたところ、複式炉のみのものを含めると20軒以上の存在が予想された。これらは重複も甚だしく全て良く整った複式炉を持つものであったので、各方面と協議し、6月10日までの調査予定を2週間延長することとした。また、これと併せて、秋田県払田棚跡調査事務所にも実測方の応援を仰ぐこととした。

6月に入ってからは遺構の検出、写真撮影、実測を同時に並行して行なう毎日となつた。23日までに、縄文時代の竪穴住居跡15軒の他、複式炉のみのもの14基、その他の炉3基、土壙などを検出した。土壙は調査区内だけでもさらに10基前後の存在が予想されたが、期間がなく調査できなかつた。

6月24日までに検出した遺構の実測、写真撮影を全て完了し、同27日、プレハブの解体、機材、遺物の運搬をして全ての作業を終了し、未発掘部分の多い遺跡への未練と、予備調査(範囲確認調査)の大切さを痛感しつつ遺跡を去つた。

第4章 調査の記録

今回の内村遺跡発掘調査で発見した遺構は大きく分けて二時期ある。1つは縄文時代中期に属するもので、他の1つは平安時代のものである。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の発見遺構は中期末葉に属する竪穴住居跡15軒、炉跡16基、土壙4基である。このうち複式炉は基本的には1つの住居跡に付随するものと考え、竪穴住居跡に含めるのが妥当と考え、そのように記述した。ここでは、発見遺構のうち5軒の竪穴住居跡について報告する。

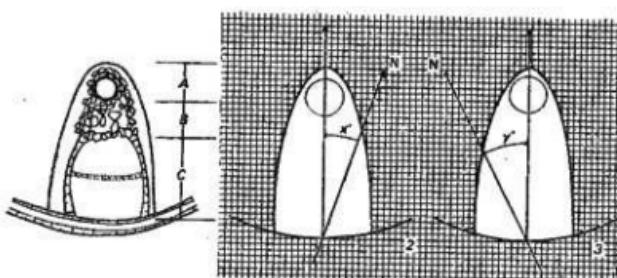
1. 発見遺構と遺物

1) 竪穴住居跡

おおよそのプランが確認できた竪穴住居跡は15軒である。これらは全て同時に存在したものではなく、互いに重複しているものもある。平面形は円形、開丸方形、不整円形で、全て複式炉を有する。

複式炉の説明の場合、その各部の名称が繁雑にならないよう、便宜的に第5図1のように呼称することにした。

プランの確認できた複式炉は全てC部外端が住居跡壁に接している。このことから炉の軸線方向を求める場合、第5図2・3のようにした。つまり炉の長軸中心線と磁北とのなす角度をこれにあてている。これが真北をさす場合は 0° 真南をさす場合は 180° で、矢印の方向がN→W→Sの場合(2)はNx°W、N→E→Sの場合(3)はNy°Eである。



第5図 複式炉模式図、炉軸線方向

S I 13 壊穴住居跡（第6・7図、図版4）

〔位置〕 住居跡群中央やや内側で発見された。本遺跡では大型のものに属する。

〔重複など〕 北部でS I 21によって切られ、南東部でS I 29と重複し、南部で平安時代の壊穴住居跡S I 24に切られている。

〔平面形〕 直径8.2~8.6mの円形。

〔壁・床面〕 明確な壁は東辺と北西辺のみ。この部分では高さ10~15cmを測り、垂直に近く立ち上る。床面はゆるい凹凸があるが、厚さ2~3cmの貼床で堅くしまっており、中央部から四方に広汎に焼けている。

〔柱穴〕 総数20本の柱穴があるが、P₁、P₃、P₄、P₅のように径70cm、深さ50cm前後のものと、P₇~P₈のような径30cm、深さ30cm前後のものがある。P₁~P₅の5本が主柱穴かと思われるが、P₃は土壙と重複している可能性もあり、はっきりしない。

〔壁構〕 東辺と北西辺で認められる。幅15~20cm、深さ5~10cm。

〔炉〕 逆V字形をなす複式炉。A部の埋設された土器の周囲の石は若干抜き取られた可能性がある。B部のA部寄り、石組斜面にも土器が斜めに埋設されている。B部の中央底部には石組がないが、A部同様、非常によく焼けている。C部は攪乱によりはっきりしないが、わずかに貼床がある。輪線方向はN35°W。

〔その他〕 S I 21やS I 29と重なり合う部分には地山土に似た黄褐色土が厚く堆積しており、プランの確認や重複関係をそれほど明確にし得なかった。

〔炉埋設土器〕 2つある埋設土器のうち第7図がB部斜面の埋設土器である。頸部のくびれる深鉢で、わずかに上半を欠く。浅存高50cm。磨消繩文による楕円形文、C字状文などを1~3個組み合せて6つの区画を作り、それぞれの間を沈線で区切る。この区画のための沈線は2本ずつそれぞれ連続する可能性があり、この場合、上部で閉じられる区画と開いている区画が交互する形になる。

S I 21 壊穴住居跡（第8・9図、図版4・5）

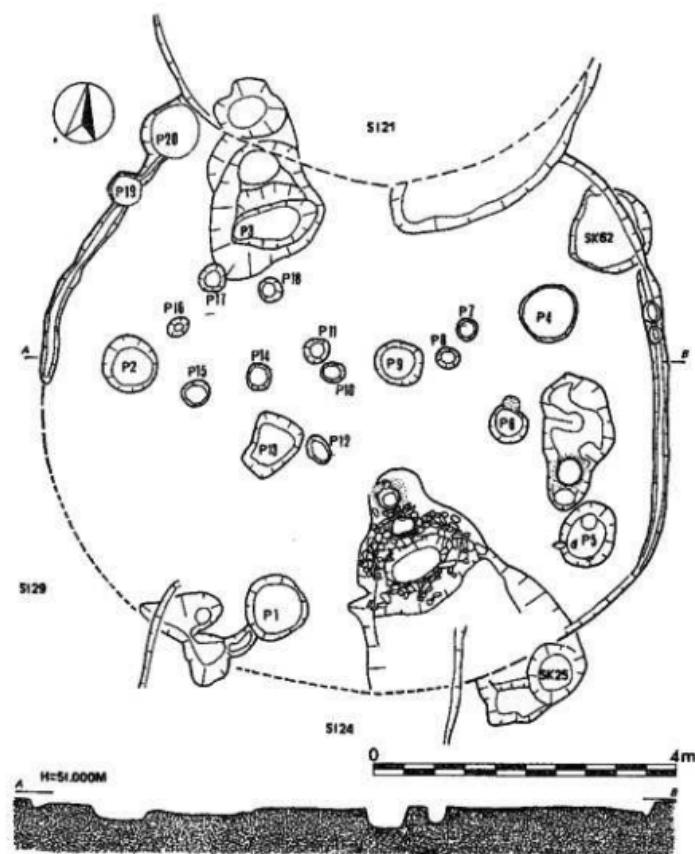
〔位置〕 住居跡群中央北部、砂利層を掘って構築されている。

〔重複など〕 南部でS I 13を切り、西部でS I 22に切られている。

〔平面形〕 直径約6mの円形。

〔壁・床面〕 東~北辺で25~30cmの高さを持ち、ほぼ垂直に立ち上る。S I 13、S I 22との重複部分で不明。床面は南西部を除き平坦で、黄褐色粘質土を厚さ3~5cmに貼っており、堅くしめられている。

〔柱穴〕 柱穴は床面上では8本あるが、P₃、P₅、P₆、P₇、P₈の5本が主柱穴かもしれない。これらは深さ35~50cmで、中には柱アタリかと思われる理上状況を呈するものもある。これに

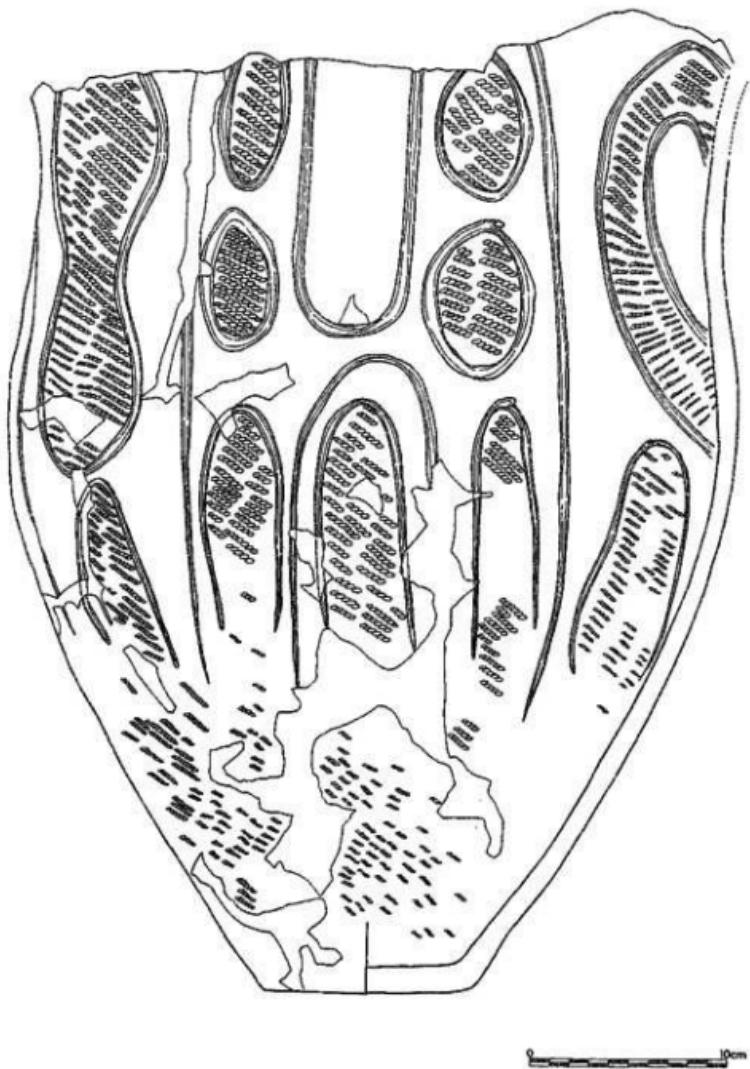


第6図 SI 13堅穴住居跡

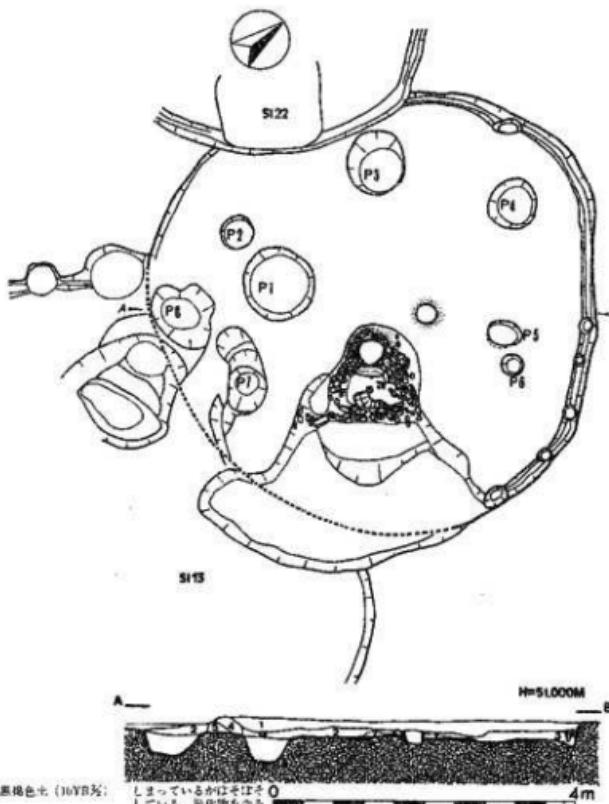
よれば、柱は径15~20cmで、柱アタリ部分を除いて柱掘り方内にも貼床が施されている。

〔壁溝〕 北~東辺にかけてきれいな壁溝がある。上幅20cm、深さ10~15cmで断面U字形をなし、ところどころに壁柱穴らしい落ち込みがある。

〔炉〕 平面形は樹の広がる逆V字形。A部には最大径42cmの深鉢形土器胴部を埋設している。B部の中央部には石組みがないか、内面がA部同様よく焼けている。A部とB部との境には比較的大きな河原石を用いている。C部は当時になされたと思われる擾乱が激しく、端を明確に



第7図 SI 13炉埋設土器

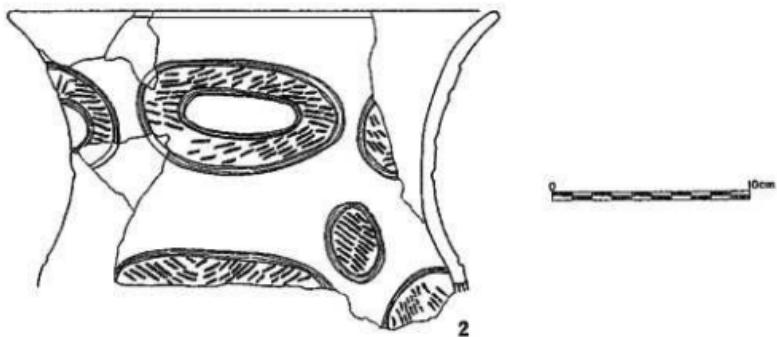
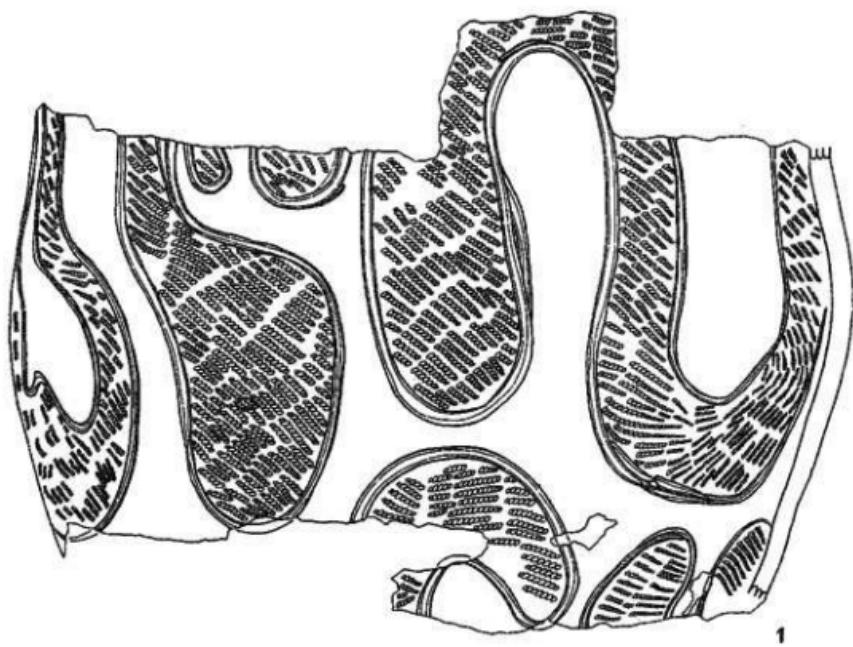


第8図 SI 21堅穴住居跡

なし得なかった。軸線方向はN 50°W。

〔その他〕 梱式がの北に焼土を伴うもう1つの埋設土器がある。断面図でわかるとおり、その上部はSI 21の床面より上であり、SI 21の後に他の住居跡などが存在した可能性があるが、発掘の段階では捉え得なかった。

〔炉埋設土器〕 第9図1がこれで、深鉢の胴部。最大径は42cmを測る。磨消織文によるC字



第9図 SI 21炉埋設土器(1), 出土遺物(2)

状文、L字状文などを横位に連続させる。側部下半にも一段の文様帶を持つ。

S I 22 壱穴住居跡（第10・11図、図版4・5）

〔位置〕 住居跡群北西部にある最も整った中型の壹穴住居跡。砂利層を掘り込んでいる。

〔重複など〕 S I 21を南東部で切っている。

〔平面形〕 径4.5~4.7の円形。

〔壁、床面〕 壁は20~30cmの高さを持ち、垂直に立ち上る。床面はほぼ全面が、厚さ2~5cmの貼床でよくしめられているが、北西部には一部これがない部分もある。

〔柱穴〕 床面での柱穴は4本でこれが主柱穴。深さは約50cm。

〔壁溝〕 上幅20~30cm、深さ15cmの壁溝がめぐり、壁柱穴がある。

〔炉〕 平面形逆U字形の整った複式炉。B部は全体が石組みで、A部同様よく焼けている。C部底面は床面よりもよくたたきしめられた貼り床。住居跡壁からB部に向かい、ゆるく下降する。C部端に円石がある。軸方向N53°W。

〔その他〕 S I 21を切っているので、これにS I 13を加えた3つの住居跡の新旧関係は（古）S I 13→S I 21→S I 22（新）となる。これは埋設土器によても背首されるところである。

〔炉埋設土器〕 第11図の1。頭部のほとんどすぼまない深鉢。頭部上半と胴下半を欠く。上部は波頭状、下部は三叉状に開く、縦に長い磨消縦文を5回くり返している。沈線内の施文はR-L-Rの複節縦文。

S I 39 壱穴住居跡（第12、13図、図版8）

〔位置〕 住居跡群北西部、地山砂利層を掘り込んで構築している。

〔重複など〕 特にないが、中央部を新しい水路で切られている。

〔平面形〕 径3.8mの円形。

〔壁、床面〕 壁はしっかりしており、高さ20cm、垂直に立ち上る。床面は平坦であるが砂利層上にあるにも係らず明らかな貼り床はなかった。

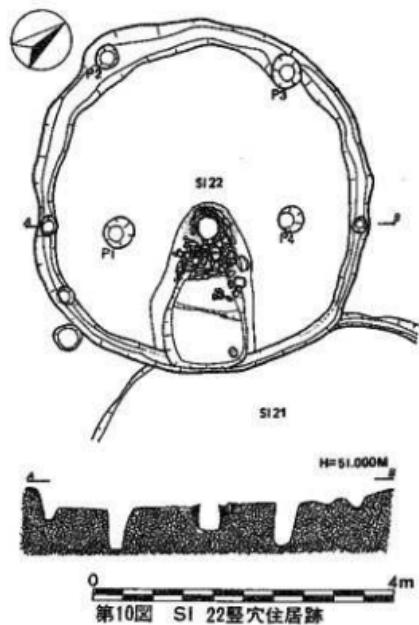
〔柱穴〕 4本ありこれが主柱穴。深さ25~30cmを測る。

〔壁溝〕 幅15~30cm、深さ5~10cmで全周する。壁柱穴は明瞭でない。

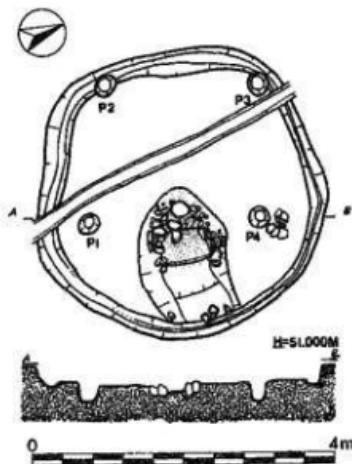
〔炉〕 A、B部ともよく焼けている。特にB部の底面は焼けて赤変し硬くなっている。B部とC部との境はわずかながら段がある。軸線方向はN79.5°W。

〔その他〕 住居跡検出後の覆土除去中、複式炉上部に図版8のような集石があった。この段階では集石上面に焼けた痕跡はなくがとは考えられなかった。住居跡絶後、炉部分にだけ石を集めたものであろうか。

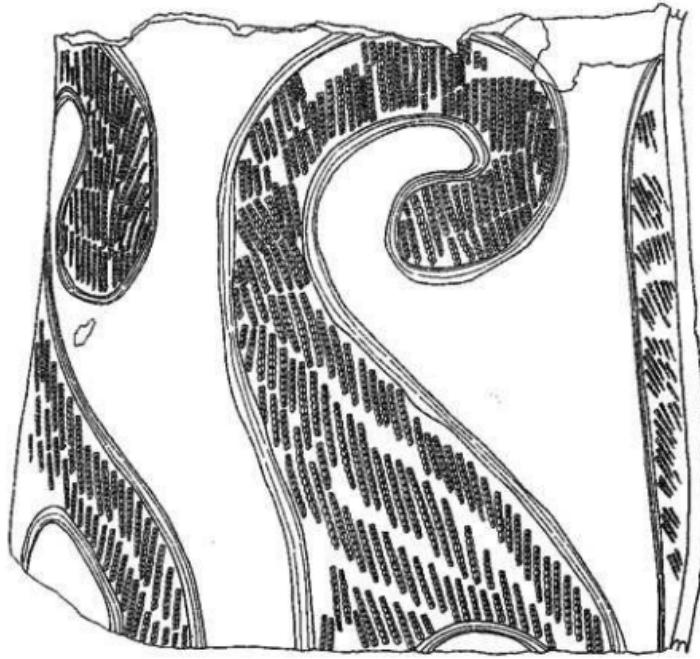
〔炉埋設土器〕 13図1がそれである。胴部上半と下半を欠く。縦文は縦位の回転施文。



第10図 SI 22竪穴住居跡

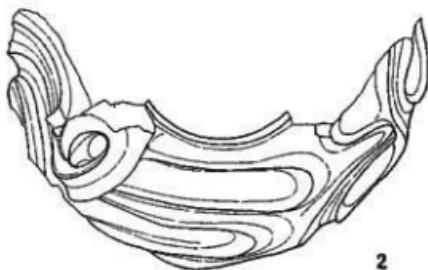


第11図 SI 39竪穴住居跡

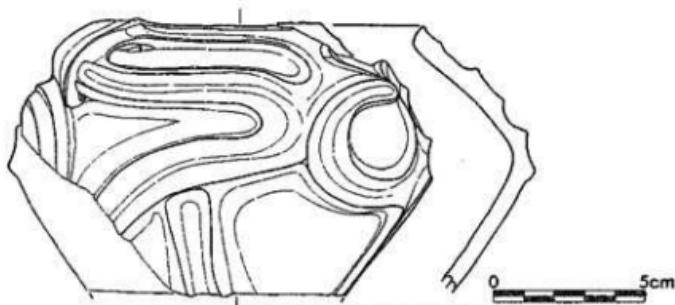


1

0 10cm



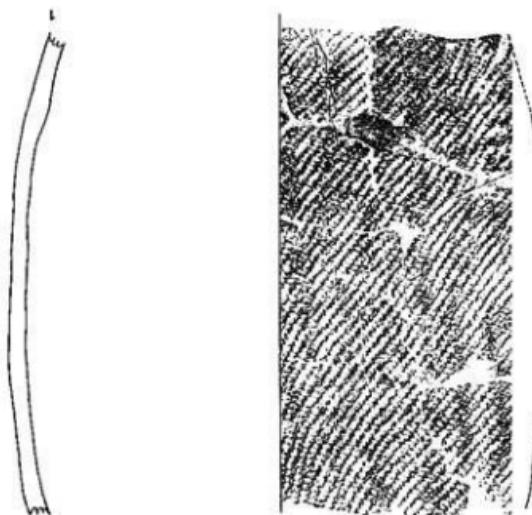
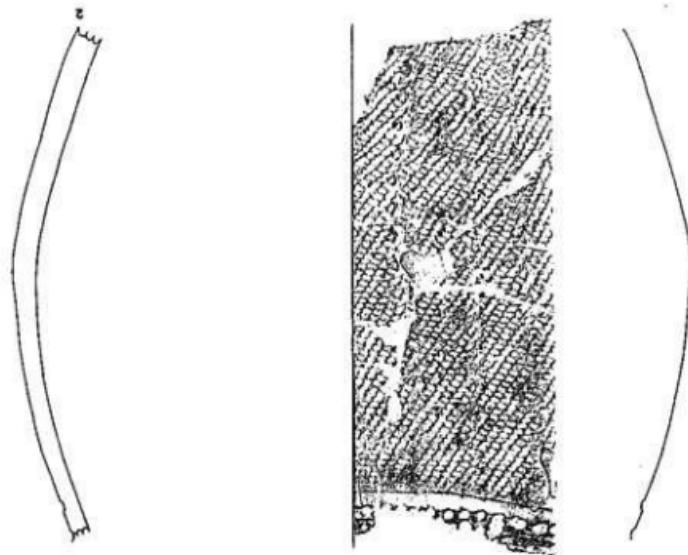
2

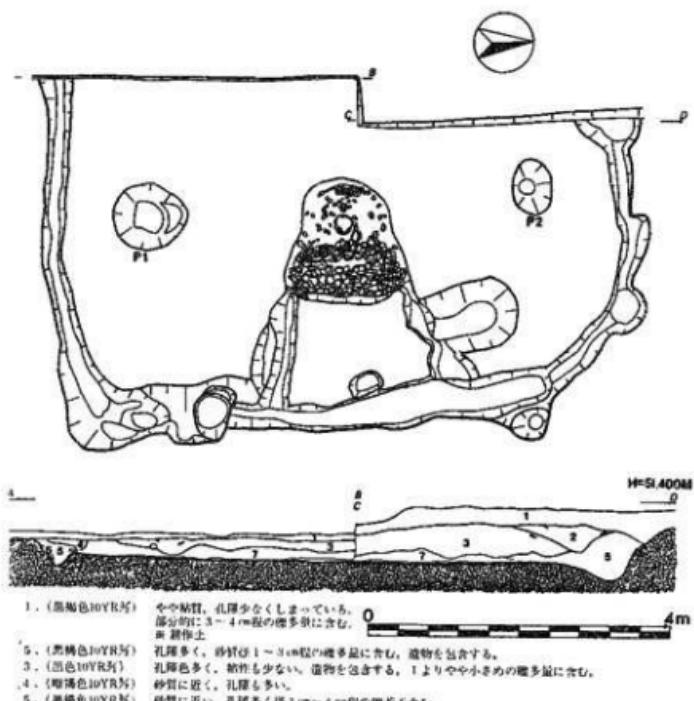


0 5cm

第12図 SI 22号埋設土器(1), 出土遺物(2)

第13圖 SI 39號埋藏土器(1), 出土土器(2)





第14図 SI 54堅穴住居跡

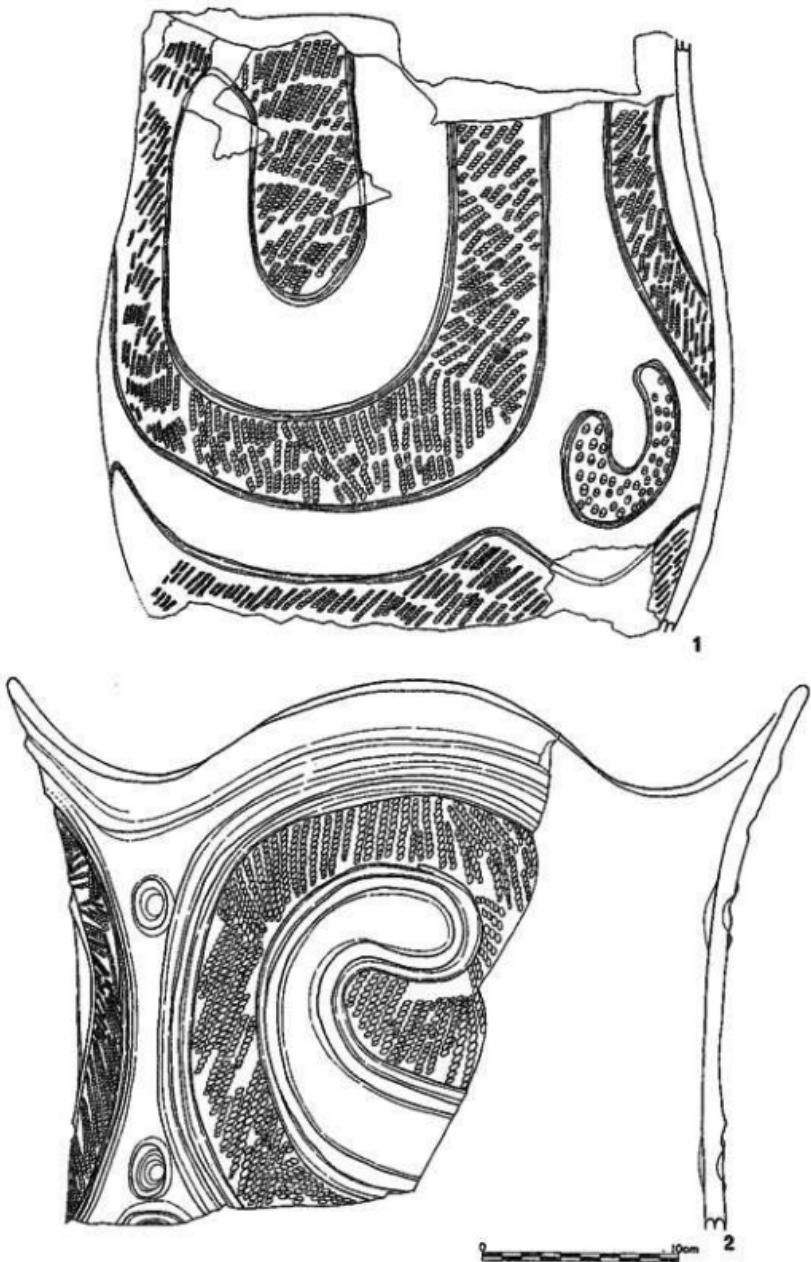
S I 54 堅穴住居跡（第14・15図、図版11）

〔位置〕 住居跡群西部中央にある。地山砂利層を深く掘り込んで構築された堅穴住居跡。

〔重複など〕 特にない。

〔平面形〕 住居跡全体の東側半分しか発掘できなかった。本遺跡堅穴住居跡は大部分が円形であるのに対し、隅丸方形のプランを呈するものと考えられる。一边約7.7~8.0mであろう。

〔壁、床面〕 東辺では地山が高く残っており、壁高50cmを測る。床面は複式炉の北側でやや不明確な部分もあったが、平坦そのもので、黄褐色粘質土を厚さ3~5cmに貼り、硬くしめている。



第15図 SI 54炉埋設土器(1), 出土土器(2)

〔柱穴〕 床面上の柱穴は2本(P1, P2)確認した。いずれも主柱穴で深さ約40cmである。未調査分を含めても4本の主柱穴と考えられる。

〔壁溝〕 幅約30cm、深さ20~30cmの壁溝が全周をめぐる。

〔炉〕 本遺跡中最大で最も整然とした複式炉が、東壁中央部に取り付いている。全体の平面形は先端が丸味のある逆V字形。A部は埋設土器を中心にして半径約60cmの円を描く。先端部には幅10cm前後、厚さ3~5cmの自然石を円周に沿って6個縦列させ、その内側に同様な石を7個放射状に配している。埋設土器の側に石團はない。B部は径10~20cmの河原石を無数に段状に積み重ね全体として長方形にした石組み部。石組み部は底面、壁面とも火勢を強く受けたと思われ、中にはボロボロに砕けた石もある。C部の平面形は上底2.0m、下底1.5m、高さ1.5mの略台形を呈する。底面は粘質土が厚さ2~5cmに貼られ、平坦で非常にかたくしまっている。両側辺にはB部から発した深さ5cmの溝があり、壁溝に至っている。N98°W。

〔その他〕 覆土中からは多量の土器などが全て破片の状態で出土した。

〔炉埋設土器〕 62図1がそれである。頸部中央が膨らむ深鉢。頸部及び胴部下半を欠く。頸部から胴中央にかけては磨消繩文による大きな渦文が3単位並び、その下に波状の沈線が一周して文様帶を区画している。渦文と渦文の間の広い無文部には刺突で充填されたC字状文が配される。

第5章 まとめ

今回の内村遺跡の調査では、調査期間等の制約などから、約2,400m²を発掘調査したにとどまった。調査の結果、内村遺跡は縄文時代前期中葉、中期中葉、末葉、平安時代後半にそれぞれ利用された複合遺跡であることが判った。特にこの中でも、縄文時代中期末葉と平安時代に属する多くの遺構と遺物が発見された。以下、この2つの時期の遺構、遺物について若干まとめてみたい。

1 縄文時代中期末葉の住居跡について

今回発見した縄文時代中期末葉の竪穴住居跡は15軒で、この他に竪穴住居跡に付随していたものと考えられる複式炉14基、土器埋設炉2基がある。竪穴住居跡はその平面規模により3種に分けられる。大きなものは径8m前後、中位のものは径4~5m、小さなものは径3m前後である。竪穴住居跡と複式炉（以下住居跡群という）についてまとめると以下のようになる。

① 住居跡群は自然堤防的な微高地先端部とその周辺に占地する。全体として東~南東側の開く馬蹄形を呈する。

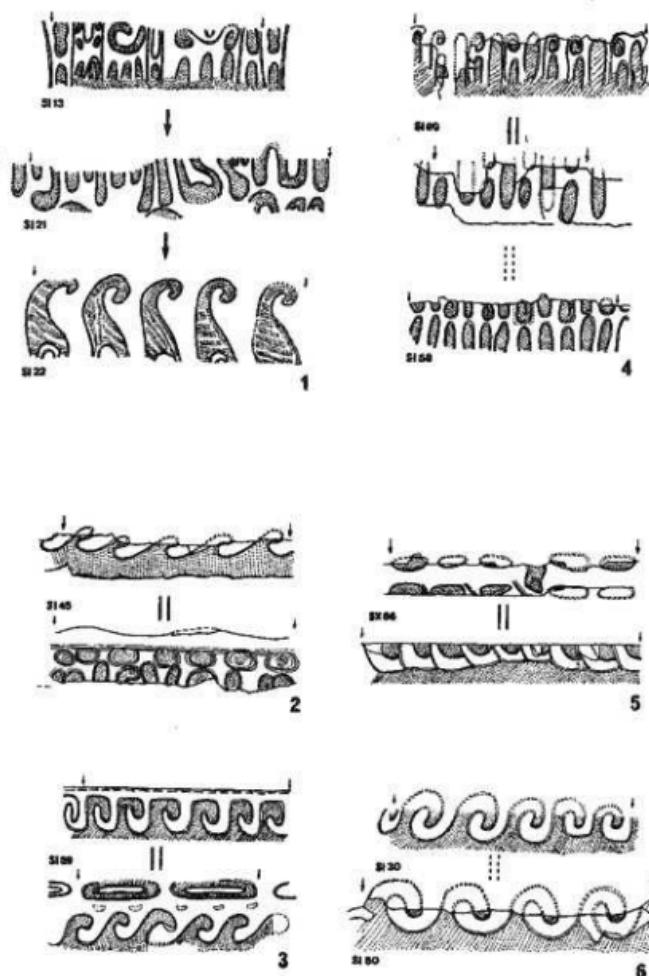
② 住居跡の平面形は円形ないし隅丸方形のものが主体をなす。
③ 規模には大きく分けて3種類ほどある。
④ 壁溝のあるものと、ないものがある。
⑤ 主柱穴は不明なものもあるが、4本主柱のものが最も多く、規模が大きくなるにつれ、本数が増える。

⑥ 床面は地山が砂利層であることが多いことから貼床としたものが多い。
⑦ 住居跡群には切り合いのあるものもあり、（古）SI 13→SI 21→SI 22（新）、（古）SI 37→SI 52（新）、（古）SI 23→SI 33（新）、（古）SI 45→SI 30（新）、（古）SI 56→SI 50（新）などが考えられる。また、この切り合いの関係などからして少なくとも数期の住居群の変遷が推定できよう。

⑧ 炉は複式炉で、炉端（C部）は住居跡の壁に取り付く。
⑨ 炉の軸線方向は、住居跡の中心を通る直線上にあることが多い。
⑩ 炉は大きく4つに分類できる。（第4章、第1節、2を参照）。これらは造構間の切り合いでII b類からII a類への変遷も考えられるところであるが、一様ではなく、現在のところ明確な時期差を表わすものとは言えないようである。

2. 縄文時代中期末葉の土器について

内村遺跡出土土器は縄文時代中期末葉のいわゆる大木9.10式土器に比定し得るものが主体



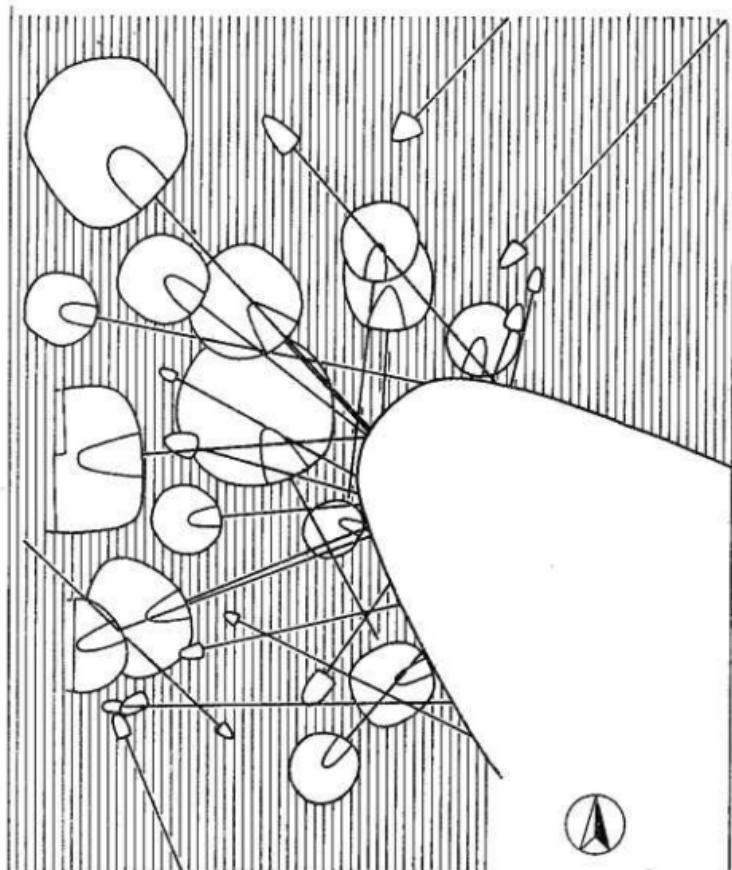
第16図 炉埋設土器展開模式図

を占める。竪穴住居跡内の、あるいは単独に発見された複式炉に埋設されている土器も全てこの時期のものである。

119図は、それらの埋設土器のうち、遺構間に切り合이があつたり、1つの炉に二重に埋設されていたりした精製深鉢形土器の抜開模式図である。太い矢印は古→新を表わし、一は二重埋設されていた土器、一はほとんど同じ文様の施されているものを表わしている。

3. 複式炉の軸線方向から見た住居跡の分布について

120図は、住居跡内に於ける複式炉の位置が、集落内に存在すると予想される「広場」方向を向くと推定されるため、その軸線の走行状況を表わしたものである。これによると、推定「広



第17図 竪穴住居跡模式炉軸線方向図

場」は南東に開く椿円形を呈する。また、ほとんどの軸線方向はこの「広場」に集中するが S I 34, 46, 49, 56などは、これとは大きくはずれるか、全く逆方向を取ることがわかる。

これらの炉（住居跡）が住居跡群の中でも最も端部に位置することは暗示的である。

4. 出土石器について

ここでは遺構内から出土した石器を除いた石器で、明確に前期のものとわかる石槍2点を除いたものについて述べる。

遺構外出土石器は総数281点である。このうち搔器が8種類146点で全体の51%を占める多さである。この搔器のうち7, 8類は細長いブレイド、あるいは剥片の一方の長辺に刃部を作出したものである。この石器の特徴は打撃面を上にして石器を見て、最も高い陵線が右にある場合は左辺に刃部があり、左に陵線がある場合は右辺に刃部が作られていることである。これは前者が右きき、後者が左ききの人が使用した石器であると考えられる。

5. 平安時代後半の土器群について

平安時代の遺構であるSK16, SI08, 10などから出土した土器群はその出土状況から見てほぼ同時期のものと考えられる。これらの土器群の特徴をまとめると以下のようになる。①須恵器の絶対量が非常に少なく、特に杯は全体でもほんの数点しかない。②土師器杯は全て色調が灰黄一に近い黄橙色を呈し、底部回転糸切離しで再調整のないものである。③口縁部が大きく外に折れ曲り、浅い皿が比較的多い。④黒色処理された土器には、ていねいな再調整の施されているものが多い。

以上、今回の内村遺跡の発掘調査結果のいくつかをまとめてみたが、今後に数多くの問題を残したものとなった。縄文時代中期末葉に関しては、遺跡の立地がこの時期以前とは大きく変わっている、今後の分布調査等でも、このことについては充分な注意が払われねばならないことを教えてくれた。本遺跡では、集落内に存在すると予想される土壤、墓域などが同時に調査され得なかったことが返す返すも残念である。

平安時代に関しては、県内でも数少ない綠釉陶器や和鏡の出土など、払田櫛跡に近い位置にあることとも合わせて、多くの問題を提起した遺跡であると言える。



図版1 上 遺跡遠景（南東►）

下 発掘前の状況（南►）



図版2 上 調査区近景（南►）

下 同上（東►）



図版3 上 調査区近景（北東▶）

下 同上（南▶）



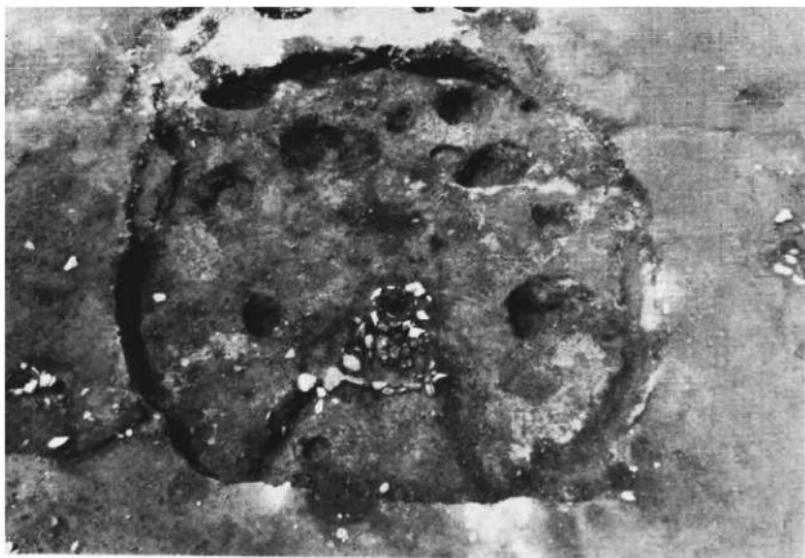
圖版4 上 SI 13 壓穴住居跡（南東►）

下 SI 21, 22 壓穴住居跡（南►）

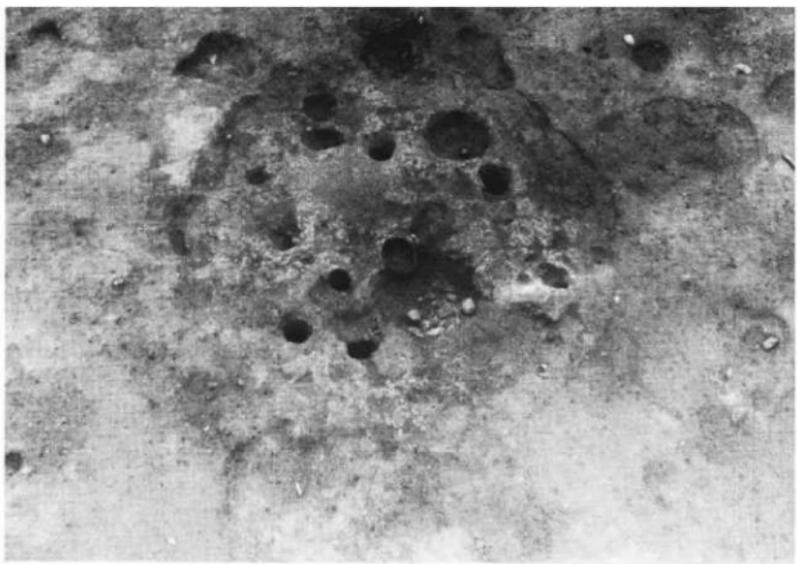


図版5 上 SI 21 壺穴住居跡（東►）

下 SI 22 壺穴住居跡（東►）



圖版 6 上 SI 23 穹穴住居跡（南►）
下 SI 23, 33 穹穴住居跡（南►）



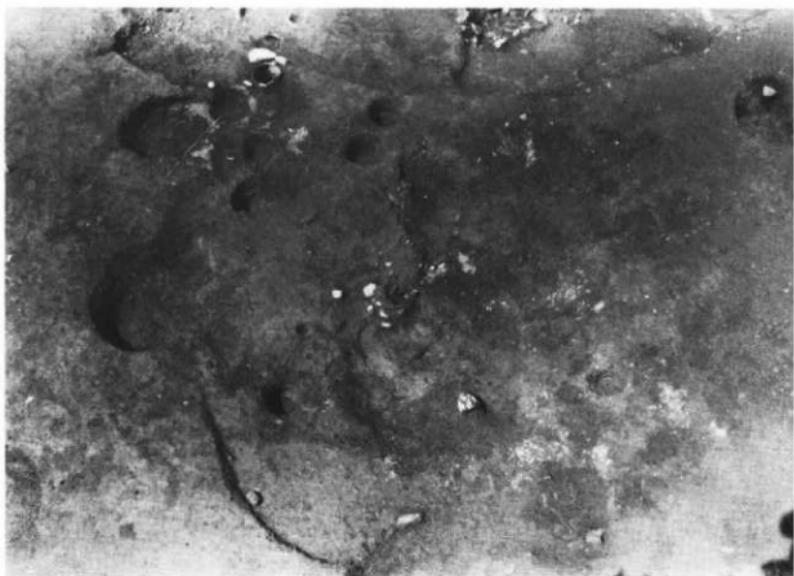
圖版7 上 SI 30 積穴住居跡 (南►)

下 SI 35 積穴住居跡 (東►)



図版 8 上 SI 39 竪穴住居跡 (東►)

下 SI 40 竪穴住居跡 (東►)



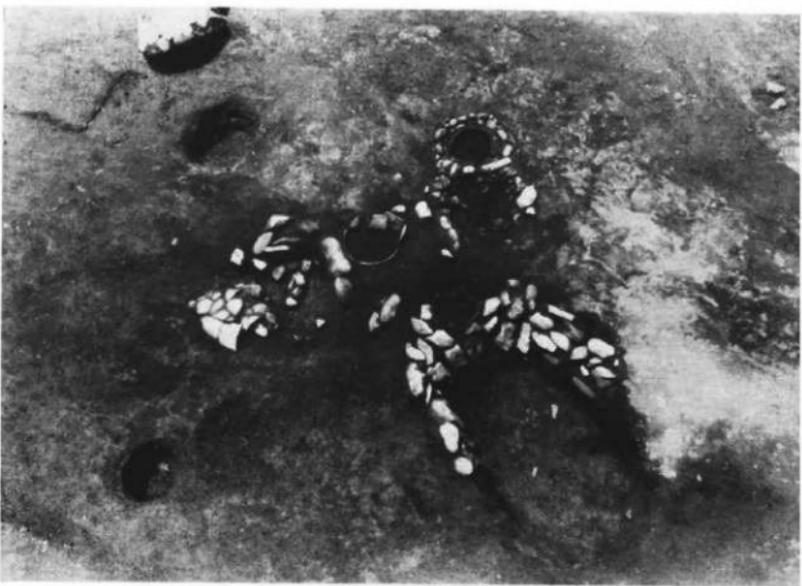
圖版9 上 SI 47 嚓穴住居跡 (東►)

下 SI 51 嚓穴住居跡 (東►)



図版10 上 SI 37, 52 積穴住居跡（東▶）

下 SI 52 遺物出土状況（西▶）



圖版11 上 SI 54 穹穴住居跡（東►）

下 SI 50, 55, 56 爐（南東►）



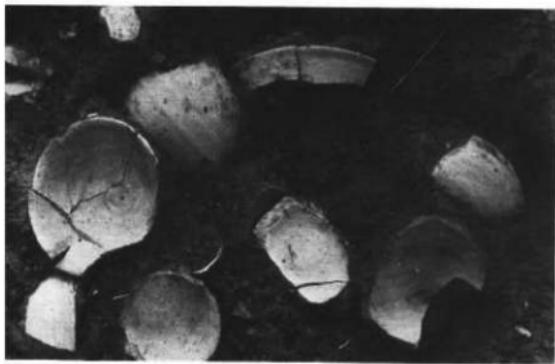
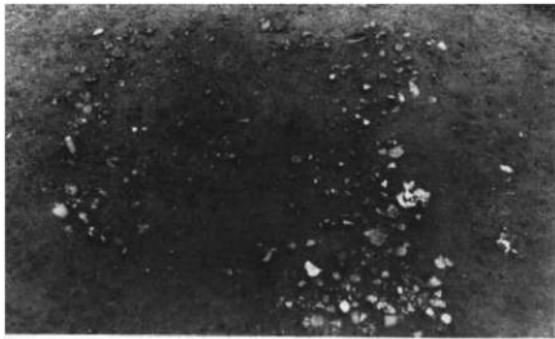
圖版12 上 SI 59 壓穴住居跡（北►）

下 SI 08 壓穴住居跡（西►）



圖版13 上 SK 16
豎穴住居跡
中 SI 40
遺物出土狀況
下 SI 51
遺物出土狀況

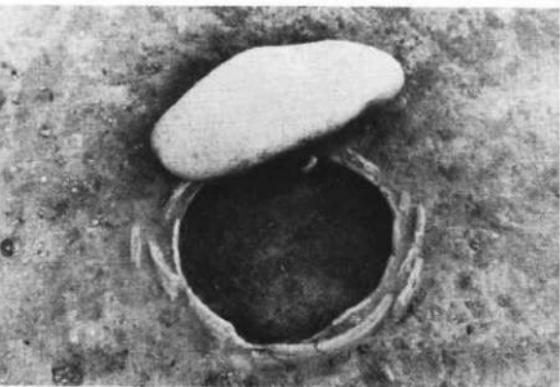
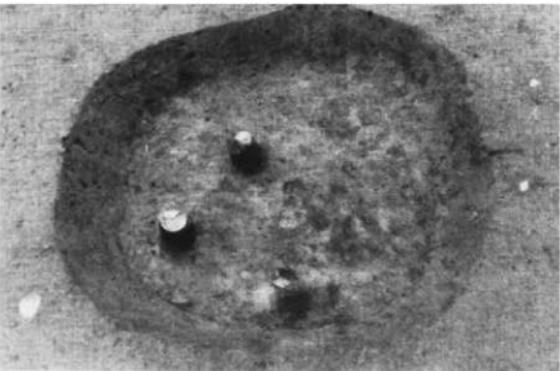




图版14 上 SK 16 遗物出土状况

中 同上

下 同上



図版15 上 SK 02

中 SI 10 カマド

下 SI 68 炉

III. 桐木田遺跡

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

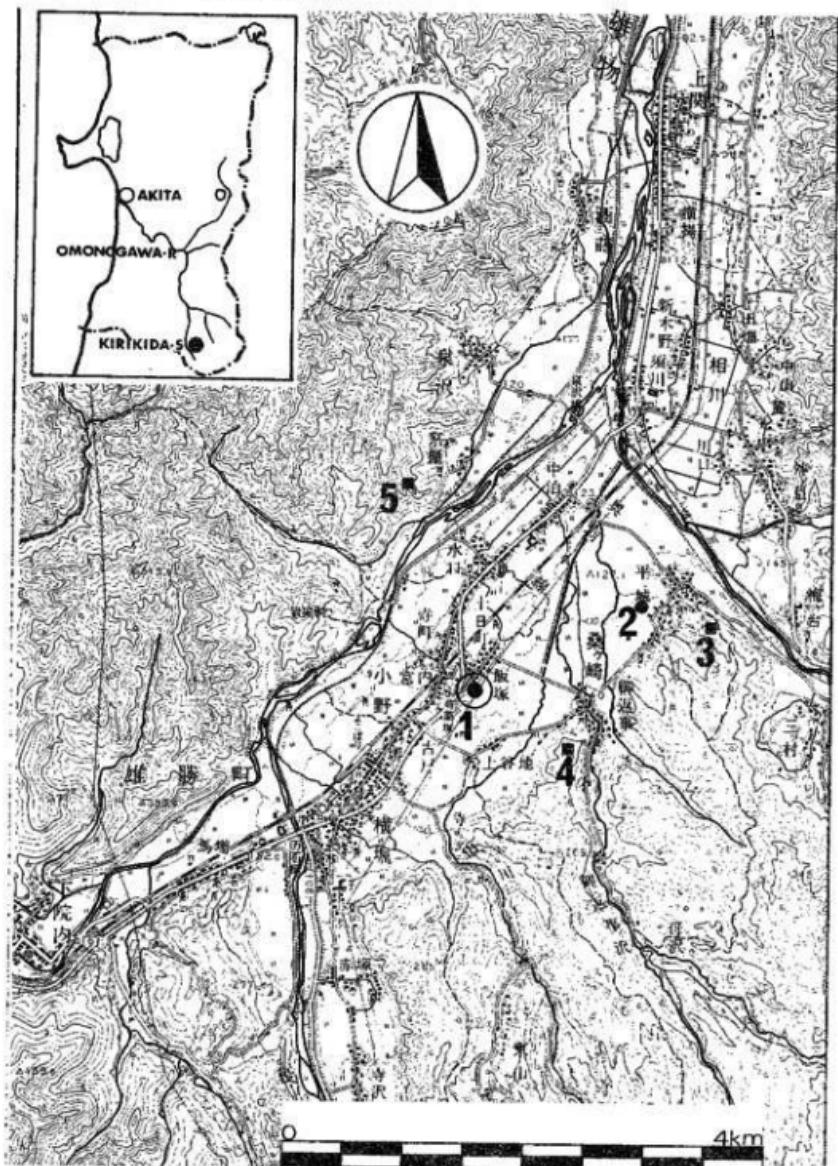
雄勝郡雄勝町に所在するいわゆる「桐木田井戸」は平安時代の歌人小野小町の使用した井戸跡と、古くから言い伝えられていた。昭和47年の山本博士の井戸跡鑑定でも、平安時代から見られる型式のものであるとされ、井戸跡の周囲に古代等の遺構の存在が予想されていた。しかし、この地域が昭和53年度より実施されている県営ほ場整備事業地域内にはいるため、秋田県教育委員会では昭和54年10月22日～11月1日、遺跡の性格及び範囲を確認する調査を行った。その結果、壠跡、柱穴などの遺構、中世末～江戸期に属する陶器、染付などの遺物が発見された。

このため、秋田県教育委員会では、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存をはかり、今後の資料に資するものとした。

第2節 調査の組織と構成

遺跡名	桐木田遺跡
遺跡所在地	秋田県雄勝郡雄勝町小野字飯塚
調査期間	昭和55年7月3日～9月20日
調査対象面積	2,900 m ²
調査面積	2,900 m ²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	畠山憲司（秋田県教育庁文化課）
調査員	山田貞吉（平鹿町教育委員会）
調査補佐員	佐藤和弘
調査補助員	桑原隆、三嶋隆儀
事務補助員	佐々木恭子
調査協力機関	秋田県雄勝農林事務所土地改良課 雄勝町教育委員会
発掘調査参加者	小野田久孝、藤原和則、今幸太郎、太田三郎、今修三、篠瀬善清、今貞助、 篠瀬清一、渡辺良市、今勝藏、多田野庄藏、竹内源次郎、柴田勝美、柴田進、樋口隆、小野田良子、小野田静子、佐々木菜子、藤原アチ、藤原ミネ子、藤原ミエ、藤原ミヤ、藤原雪子、小野垣キエ子、篠瀬シズエ、小野垣

リエ、小野垣トキ、渡辺イヨ、金ユウ子、菅原さだ子、高橋サツ、東海林
ミサ、金子恵美、



第1図 遺跡の位置

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と環境(第1図)

横手盆地の最南端は雄物川の開析によってできた、東西1.5～2.0km、南北約10kmの細長い平地となっている。この平地の東と西にはそれぞれ奥羽山脈、出羽丘陵の300～800mの山地がせまり、その西裾を雄物川が北流し、東裾はかつての役内川の跡と言われる低地が走る。

樹木田遺跡はこれによって平地中央部にできた自然堤防上に立地する。現況は水田と一部畠地で、雄物川からは東1km、国鉄奥羽本線横城駅の北東1.1kmの地点である。

第2節 歴史的環境

遺跡の所在する小野地区は、平安朝六歌仙の一人小野小町生誕の地の一つといわれ、これにまつわる多くの伝説が残っている。遺跡名ともなった桐木井戸跡もその一つで、小町の庵の側にあり、小町が日常使用したものであるといわれ、地元有志により保存されている。そして昭和47年には井戸の研究者として知られる山本博氏に井戸の鑑定を依頼し、以下のような結果を得ている。(「雄勝町の歴史散歩」より)。

井戸構造年代鑑定書

1. 秋田県雄勝郡雄勝町小野所在、石井年代について、その剖面を次の通り鑑定する。
 - イ. 自然石(凝灰岩)、乱石積、円形井筒
 - ロ. 口径50～55cm
 - ハ. 口縁部より水面まで1.6m
- ニ. 総深3.9m
- ホ. 口縁部より約30～40cm下において、直徑を増し、径70～80cmとなり、そのまで底部にいたる。
- ヘ. 井壁の石積みは削掘当時のままと認める。

2. 右の井筒構造は平安初期より現われたもので、小野の石積み井筒もその一つに當るものであると認める。

右の通り鑑定する。

昭和47年8月28日

大阪学院大学教授

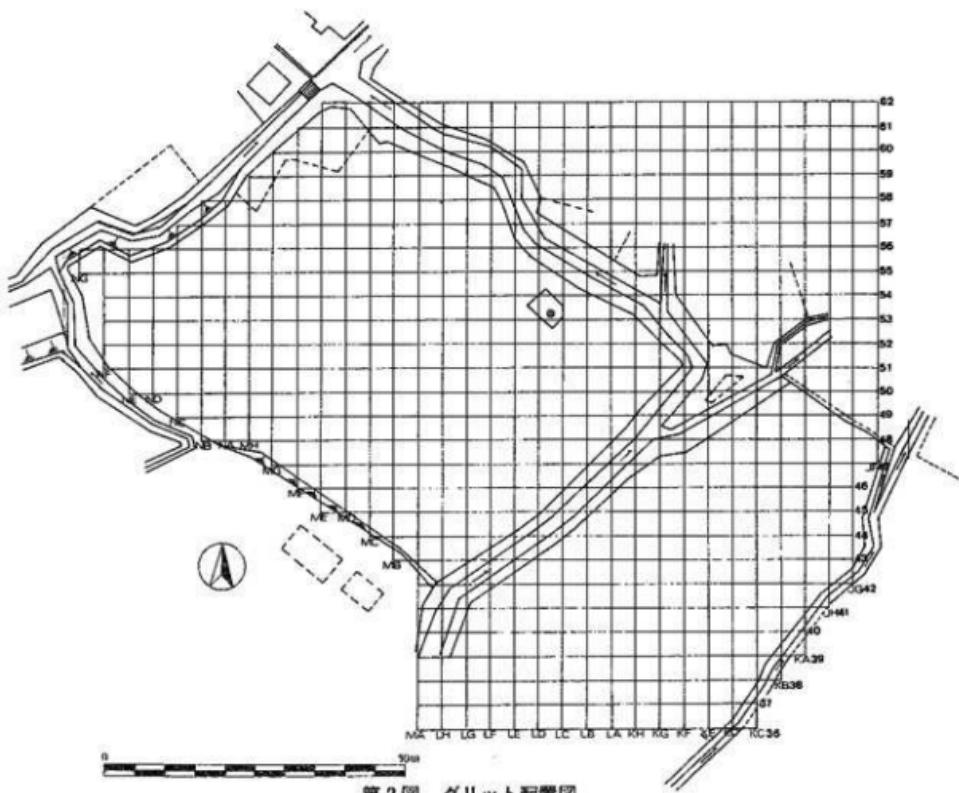
文学博士 山本 博

秋田県雄勝郡雄勝町小野遺跡 保存会 御中

第3節 周辺遺跡

本遺跡の周辺に存在する遺跡のうち、中世に属すると思われるものは比較的多い。半径2km以内の城館では山城である小野城跡（1図5）、御返事城跡（1図4）、館跡（1図3）の他、平城である鶴沼城跡（1図2）があり、役内川下流から奥羽山脈西麓沿いには多くの板碑群が存在する。

しかし、近世に入ると調査例もほとんどなく、わずかに鶴沼城跡において、江戸時代前半のものと思われる掘立柱建物群や、井戸跡などが知られているにすぎない。



第2図 グリッド配置図

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

明治時代初期の地籍図を見ると、井戸跡の東方約50mに、長さ約50~60mで西に開くコの字形の堀跡らしきものがあるのがわかる。この堀跡はそのまま西に延びて遺跡全体を長方形に囲むように見えるが、中央部を南北に走る水路などによりかき消されている。遺跡はこの地籍図が作成された段階で既に水田であり、現在は水田と一部畠地となっている。

遺跡全体での高低差はほとんどないが、南西側がわずかに高く、中心部の標高は約136mを測る。

遺跡の層序は、第1層黒褐色耕作土(15~20cm)、第2層黒褐色土(10~15cm)、第3層暗褐色土(10~20cm)、第4層褐色地山土となる。このうち、遺物は2、3層中にあり、遺構の明確なプランは、地山直上でわかる。

遺物は総じて少なく、主に遺構の覆土中から発見される。

遺構は堀跡及び溝の内側5m前後の範囲には検出されず、I区中央西部に柱穴群が集中する。柱穴群中に土壌、竪穴遺構はほとんどなく、その縁辺に見られる。

第2節 調査の方法

発掘にあたり、4m×4mグリッドによる調査方法をとることとし、座標軸にあたる東西の基線は2桁の数字、南北の基線はアルファベット2文字の組み合わせを用いた。すなわち、東西の場合、西に4m行くごとに数字が1つずつ増す。(…38, 39, 40, 41…). 南北の場合は南から北に4m行くごとにアルファベット2文字のうち1桁目の文字がA~Hまで変わり、(…MA, MB, MC, MG, MH…), 32m行くと2桁目の文字が変わる(…MG, MH, NA, NB…NH, OA…).

I区ほぼ中央部に任意の基準杭を打ち、これをMA50とし、東西、南北の基線はこの点で磁北を求め、これに従った。それぞれのグリッドの名称は4m×4mグリッドの南東隅の交点座標名をそのまま使用した(MB51, LG45…).

第3節 調査経過

I区の発掘調査は、7月28日から9月22日まで実施した。

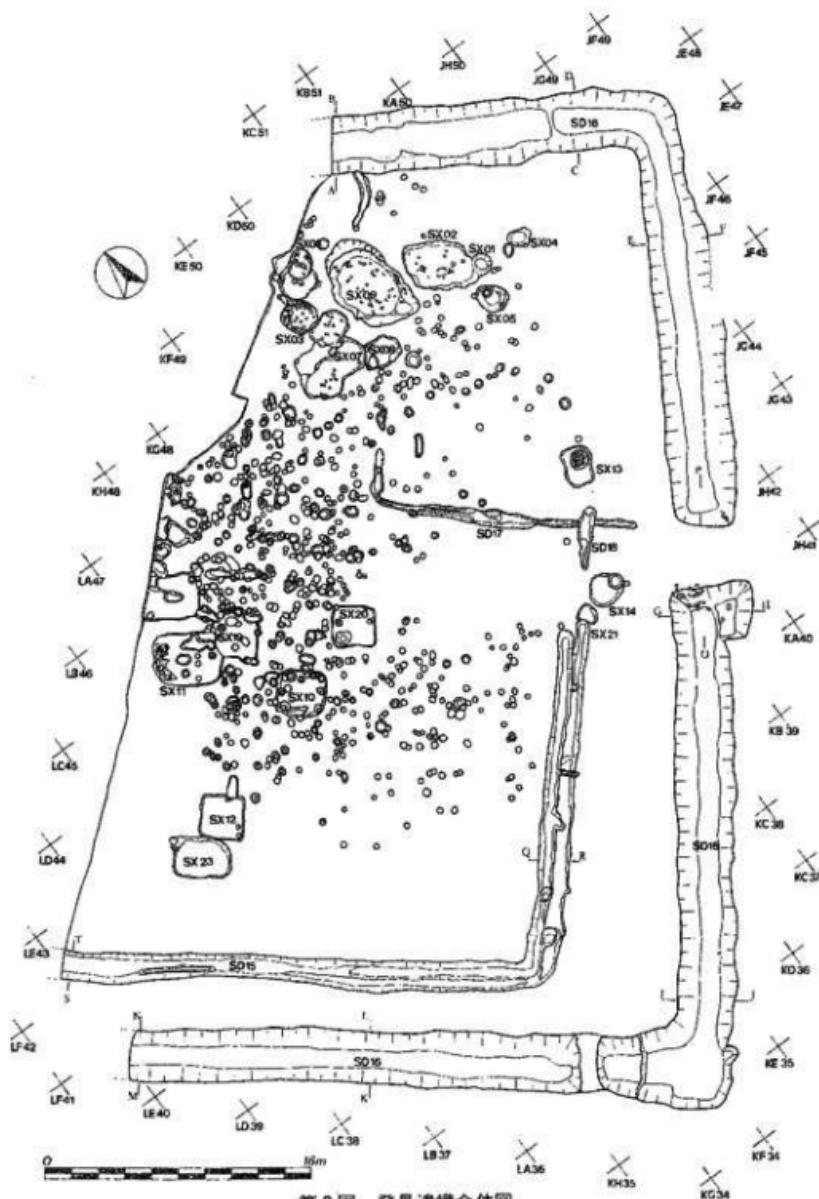
調査区はあらかじめ重機で表土を除去していたが、柱穴等の遺構が明確でないため、結局は地山直上まで全面を掘り下げるにした。7月30日、調査区中央部で方3.5m前後の竪穴状

落ち込み、東部で幅4mの堀を検出。堀（S D16）はほぼ直線で、北北東—南南西の方向で続いている。8月1日、調査区北部でSK01, 02の土壙を検出。これらの土壙は、不定円形～椭円形を呈し、埋土中に拳大～半人頭大の河原石が多く含んでいたが、それほどまとまりのないものであった。2日からSX03, 06, SK07～09等の遺構を検出。SX03, 06は集石遺構であった。4日ごろから調査区西部を中心にして径30cm前後の柱穴が現われ始めたが、これらは切り合いか激しい上に、東側ほどプランの確認が困難な状況にあった。

8月8日までに、SD16の北辺及び東辺を検出。北東部で直角に曲がっており、東辺は50m以上続くことがわかった。また、調査区南部では、幅約2mの溝（SD15）がSD16の東辺に直交するようあり、SD16の手前約8mで北に直角に折れ曲がっていることも判明した。このSD15は断面の精査等で新旧2時期あることもわかった。19日からSD15, 16や柱穴、土壙等の覆土除去作業を開始。その結果、SD16東辺のはば中央部に上面幅約3.5mの土橋が存在することがわかった。

8月29日から残っている調査区南側の表土剥ぎ及び遺構の検出を行ない、SD16が、調査区東北隅屈折部から約60m南南西で、西北西に直角に曲がることを確かめた。

9月に入り、柱穴の掘り上げ、堀、溝等の断面の実測、写真撮影を行なったが、作業の途中で、雄勝農林事務所から、9月いっぱいの調査を10月まで伸ばし、水路の西側も（これをII区とした）、1,600m²ほど調査してほしい旨の依頼があり、協議の結果、原因者負担分のみでこれを行うことになった。このため、9月10日からはII区の表土剥ぎも併行して行うこととし、I区の実測、写真撮影を完全に終了したのは9月20日であった。



第3図 発見遺構全体図

第4章 調査の記録

第1節 発見遺構

今回の発掘調査で発見された遺構は堀1条、土橋1基、溝3条、竪穴状遺構5基、土塙9基、石組・集石遺構3基の他、柱穴多数である。柱穴は柱筋の通るものもわずかにあり、獨立柱建物になると思われるが、今までのところ明確な建物として図示できるものはない。

ここでは堀とその内側に堀に沿って構築されている溝についてのみ報告したい。

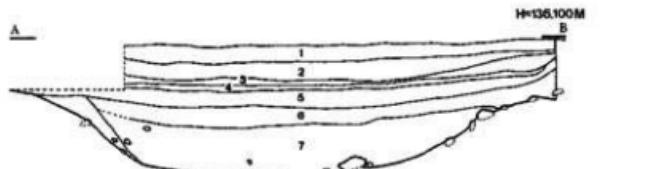
1) SD16 堀跡（第3, 4, 5, 6図、図版1, 2, 3, 4）

調査区の西辺を除く各辺の端で発見された堀跡である。北辺一東辺一南辺と西に開くコの字である。北辺で長さ20m、東辺で60m、南辺で36mほど確認された。上幅3~3.5m、下幅1.3~1.7m、深さ約1mを測る。4~6図に各部の断面図を示してある。東辺のほぼ中央に上幅3.6m、下幅6m、高さ1mの土橋がある。この部分、堀としては掘られないで、最初から土橋としてあるものである。堀の埋土中からは江戸時代初期と思われる染付、木製椀、櫛などがわずかに出土しているが、後者は遺存状態が良くなかった。

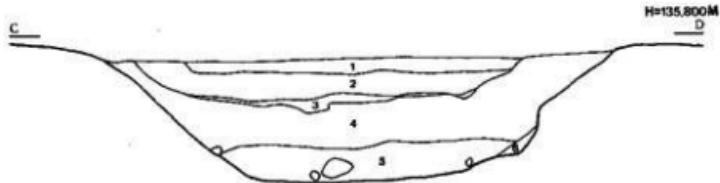
2) SD15 溝（第3, 7図、図版5, 6）

堀の内側に堀と並行するようにしてある溝である。堀との間隔は南辺で約3m、東辺で6mで、東辺のそれは土橋の前までしか掘られていない。南辺で30m、東辺で21.6m検出された。

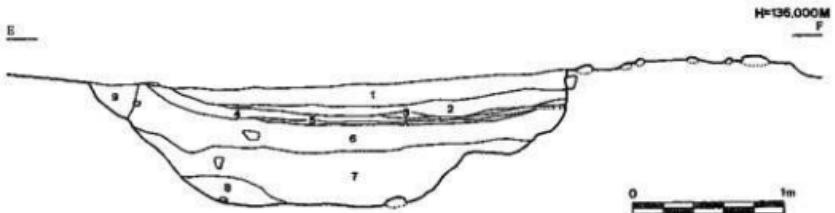
SD15はほぼ同じところに2度掘られている。Aが新しくBが古い。Aは上幅1.5m、下幅0.5m、深さ約0.4mで、Bは上幅1.7m、下幅0.6m、深さ0.9mとAよりも規模が大きい。埋土中からはわずかに染付などが出土している。



- 1層 黒褐色土 (10YR5分)
2層 暗褐色土 (7.5YR5分)
3層 布褐色土 (10YR5分)
4層 黑色土 (10YR5分)
5層 暗褐色土 (10YR5分)
6層 黑褐色土 (7.5YR5分)
7層 暗褐色土 (10YR5分)
- 粒子が細かく、粘子の特徴があり、センイ質を含んでいる一様な土質土である。
粒子は第1層より粗く、粘性はない。1層より細かいセンイ質をう、遺物は含まれない。
粒子が細く粘性は弱い。遺物は見られない。
非常に硬い金属の酸化鉄土塊と初期色土 (7.5YR5分) の粒子の粗い土とが混じり合っている。
粘性はなく、遺物の他の包含物は認められない。
若干砂質性を帶び粘性がある。遺物は見られない。
砂質土塊で遺物は含まれないが、礫が混入している。
6層とほぼ同じ。礫はさらに多くなる。

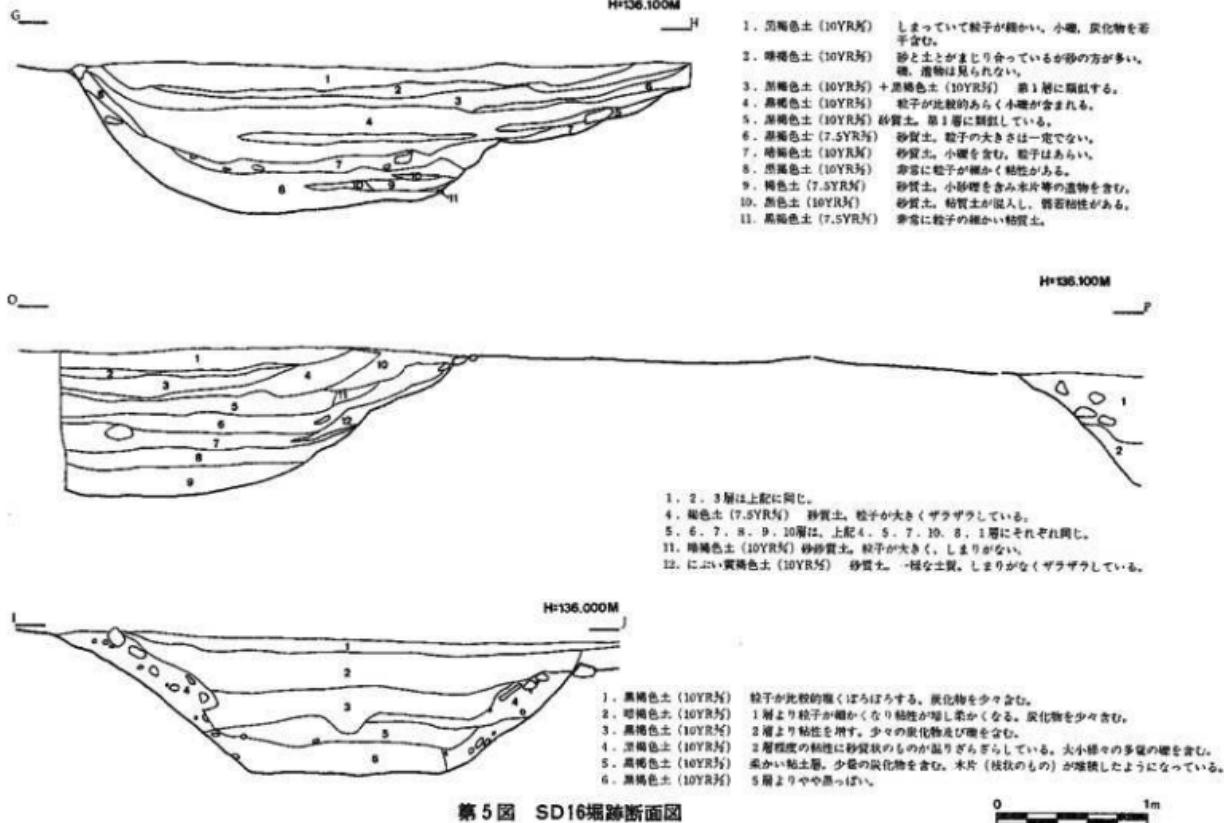


- 1層 布褐色土 (7.5YR5分)
2層 暗褐色土 (7.5YR5分)
3層 布褐色土 (10YR5分)
4層 黑褐色土 (10YR5分)
5層 黑色土 (10YR5分)
- 粒子が細かく粘質の土壤、少量の炭化物と小礫を含む。
1層より黒っぽくやわらかい、炭化物は含まれるが礫はほとんどない。
粒子の大きな砂質状の土壤、少量の炭化物を含む。
粒子が非常に細かくやわらかい粘土壤、炭化物あり。木片（枝状のもの）が堆積したよう
になっている。
4層と同様、本片は少なくなり、大きな河原石が含まれる。



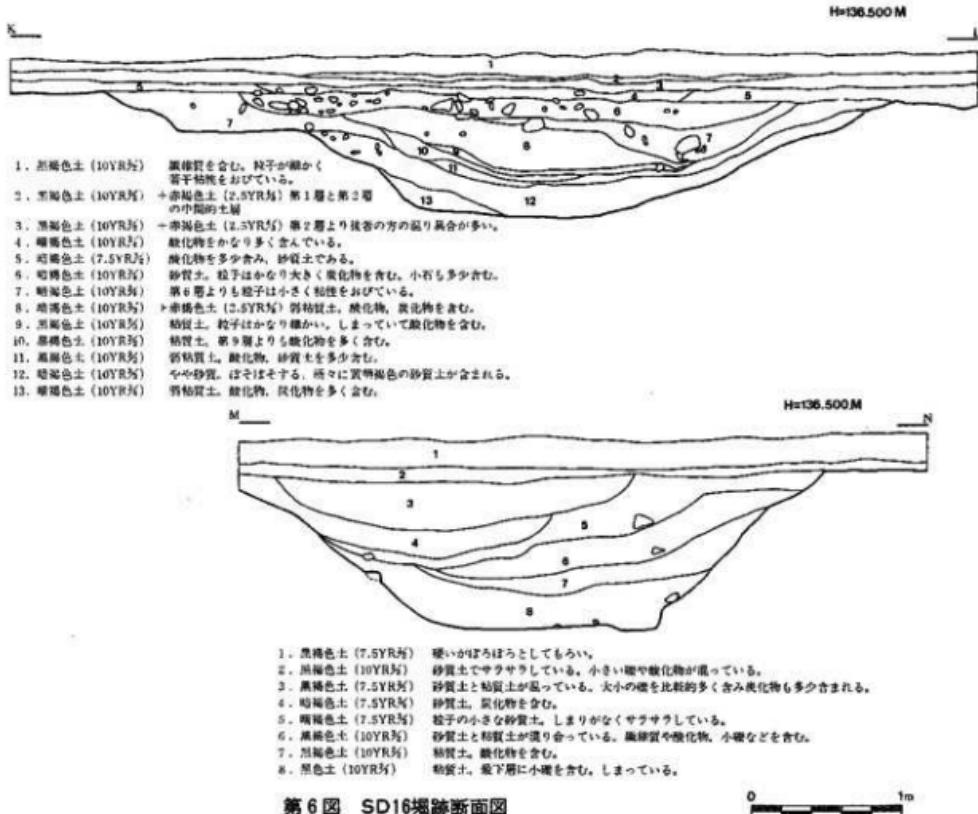
- 1層 布褐色土 (10YR5分)
2層 黑褐色土 (10YR5分)
3層 暗褐色土 (7.5YR5分)
4層 黑褐色土 (10YR5分)
5層 黑色土 (10YR5分)
6層 黑褐色土 (10YR5分)
7層 暗褐色土 (7.5YR5分)
8層 暗褐色土 (7.5YR5分)
9層 暗褐色土 (7.5YR5分)
- 粒子が細かく、若干粘性がある。炭化物小礫を少量含む。
粒子は細い、炭化物はないか小礫を含む。
粒子が細く、砂が混り合っている。遺物はなし。
粒子が細く、砂封土層が混入している。
粒子が細く粘性がある。また動物センイ質が混じっている。炭化物等は見られない。
粒子が細く粘性がある。またセンイ質が混じている。遺物等は見られない。
粒子が細く粘性が多少ある。またセンイ質が混じている。遺物はない。
粒子が細く粘性がある。小礫が混入している。
粒子が細く粘性がある。砂質土塊である。若干炭化物を含んでいる。

第4図 SD16縦断面図

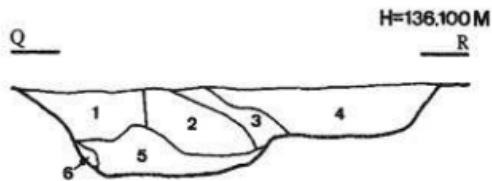


第5図 SD16堀跡断面図

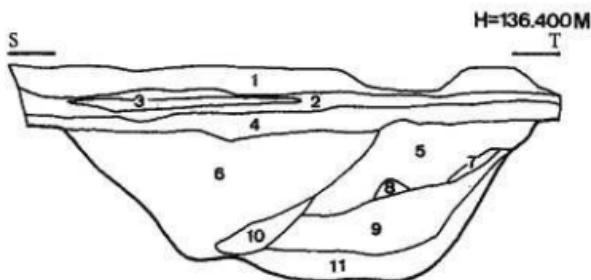




第6図 SD16堀跡断面図



- 1層 黒褐色土 (7.5YR 4/1)
2層 明赤褐色土 (7.5YR 4/2)
3層 黄褐色土 (7.5YR 4/6)
4層 棕褐色土 (7.5YR 4/4)
5層 墓褐色土 (7.5YR 4/2)
6層
- はそぼそしてもらい。
上層はしまっているが、下層はやわらかい。
やや粘性をおびる。酸化鉄、砂質土などを含む。
弱粘質土、しまりがない。炭化物を少々含む。
しまりがよい。褐色砂質土が混っている。
堆山（黄褐色土+明赤褐色土）と5層が混入している。



- 1層 耕作土 暗褐色土 (10YR 4/1)
2層 明赤褐色土 (5YR 4/2)
3層 明赤褐色土+耕褐色土
4層 耕褐色土 (10YR 4/1)
5層 暗褐色土 (7.5YR 4/6)
6層 棕褐色土 (7.5YR 4/4)
7層 黑褐色土 (7.5YR 4/2)
8層 黑褐色土 (7.5YR 4/2)
9層 暗褐色土 (7.5YR 4/2)
10層 明褐色土 (7.5YR 4/2)
11層 暗褐色土 (7.5YR 4/1)
- しまりがよい。酸化鉄を多く含む。
酸化鉄の量が多い。
はそぼそしてもらい。
弱粘質土、酸化鉄を多量に含む。
砂質土を含む。
しまりがよい。
しまりがよく。砂質土を含む。酸化鉄を含む。
9層よりしまりがよく。褐色土（砂質土）が混っている。



第7図 SD16溝跡断面図

第5章　ま　と　め

今回の調査は、最初I区のみ2,900m²の調査予定であったが、途中から変更になりII区も調査することになった。このため、建物の精査等が十分でないまま、II区に主力を注ぎ込まざるを得ないような状況であった。

II区の調査の結果、I区で発見した堀は1辺約50-60mの台形に巡ることが明らかとなった。堀の中には掘立柱建物をはじめ、竪穴状土壙、土壙などの遺構が、それぞれに切り合いながら多く分布していた。また、いわゆる「桐木田井戸」もこの堀の北西隅に位置することが判った。

堀をはじめ土壙、柱穴などの埋土中から発見される遺物はほんの一部に中世陶器と思われるものもあったが、大部分は江戸時代に入ってからのものであり、古代に属するものは皆無であった。従って、桐木田遺跡は中世での生活もあったかと思われるが、江戸時代初期の遺跡であるとするのが最も妥当と考えられ、少なくとも「桐木田井戸」が古代のものであるとする根拠は全く失われたことになる。



圖版1 上 一區全景 (南►)

下 SD 16 塚 (南東►)

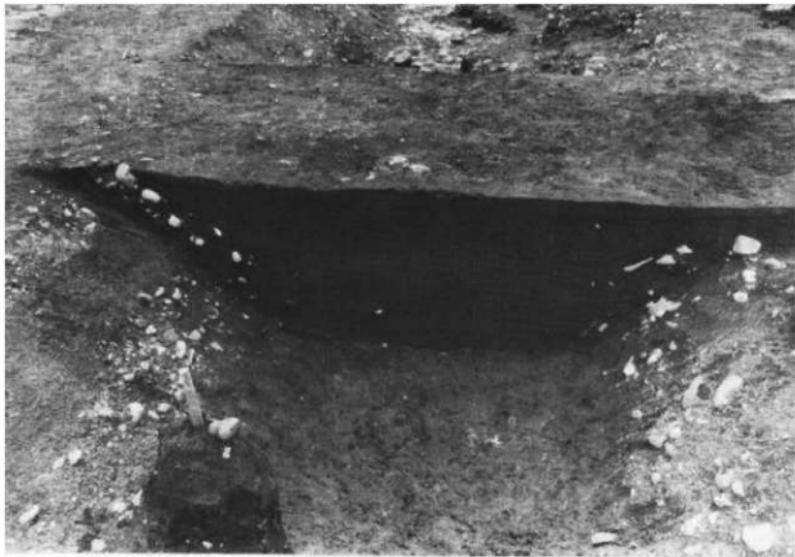


図版2 上 SD 15, 16 (北西▶)

下 SD16 堀 (南西▶)



圖版3 上 SD 16 墓斷面
下 SD 16 墓（北東►）

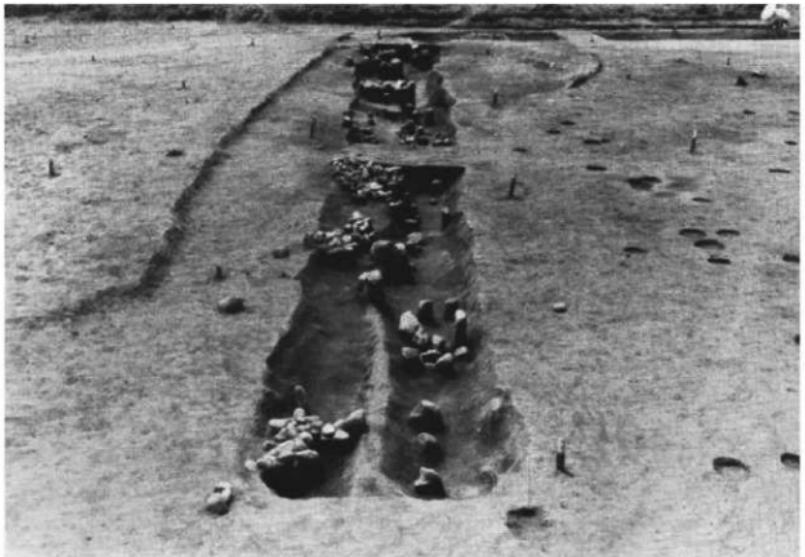


圖版4 上 SD 16 壓斷面

中 同上

下 同上

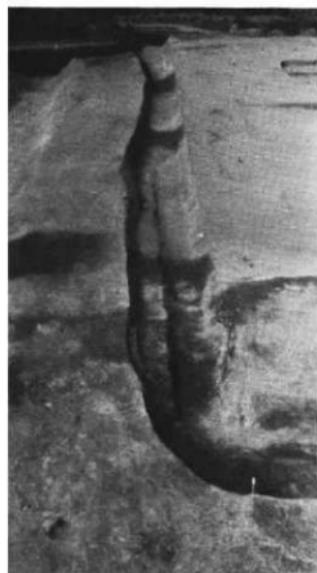




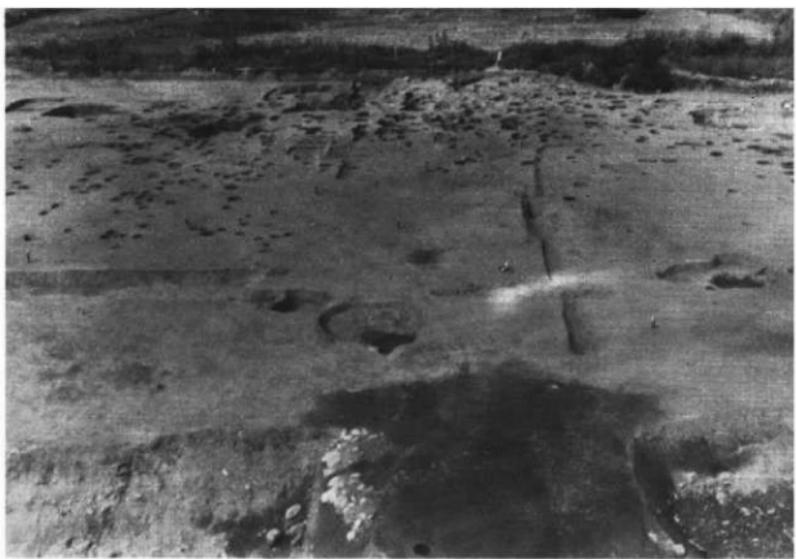
図版 5 上 SD 15 A B (北東►)

右 同上

左 同上



圖版 6 上 SX 土橋（南東►）
右 SD 15 斷面
左 SD 15（南東►）



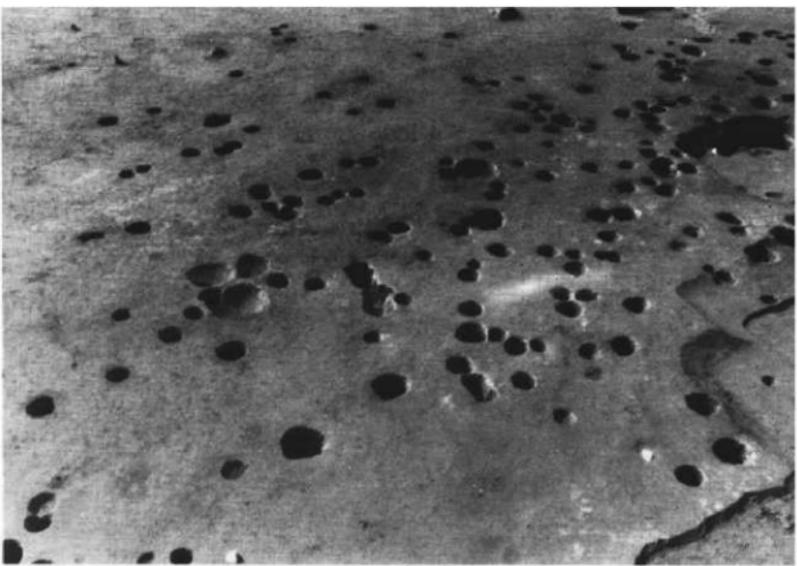
圖版7 上 柱穴群（南東►）

下 柱穴群近景（南東►）



図版8 上 柱穴群近景（南東►）

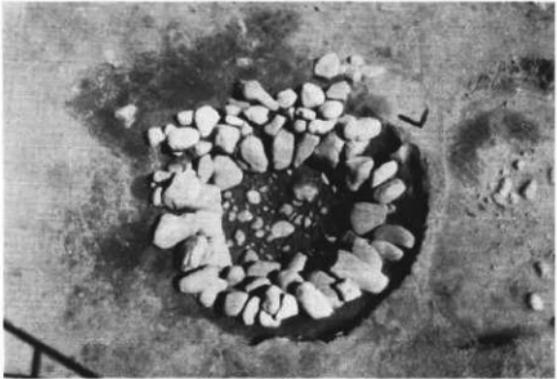
下 同上（南西►）



圖版 9 上 柱穴群南東部

中 SX 03

下 同上





図版10 上 SX 03 石組遺構

中 同上

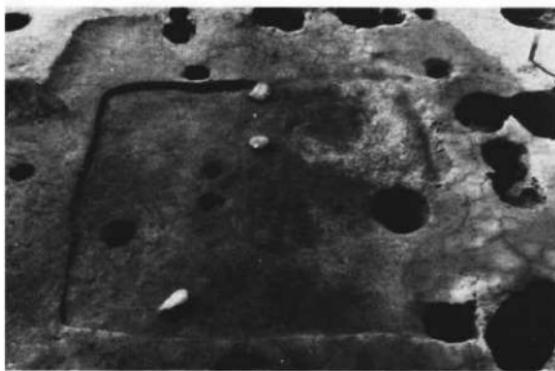
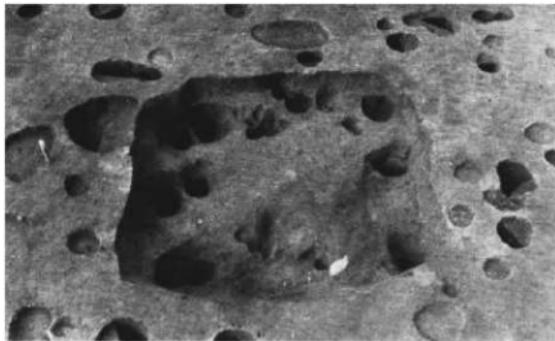
下 SX 06 石組遺構



図版II 上 SX 13

中 SX 02

下 SK 11

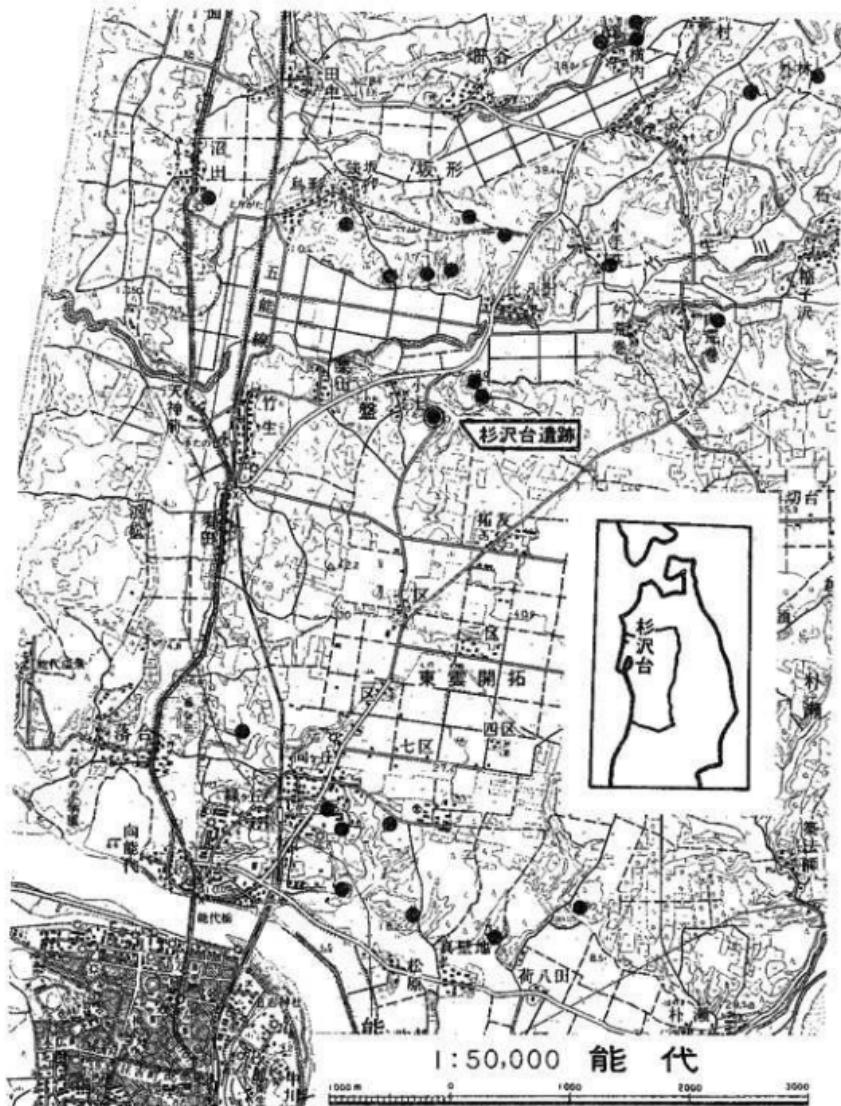


図版12 上 SK 10

中 SK 20

下 SK 12

IV. 杉沢台遺跡



第1図 杉沢台遺跡周辺地形図及び遺跡分布図

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

杉沢台遺跡は、「秋田県遺跡地図」に「杉沢野遺跡」として記載され、從来このように呼称されてきた。しかし、昨年の範囲確認調査で遺跡の広さが判明し、遺跡の所在する小字名を再吟味した結果、遺跡の大部分は杉沢台に所在することが確認された。そのため、今後は「杉沢台遺跡」と呼称していくことになったものである。

さて、昭和51年より東北農政局は米代川の右岸と左岸を対象とする国営総合農地開発事業を実施している。対象地域は、能代市・峰浜村・山本町・八竜町の4市町村におよび、その面積は3.671haである。この地域には周知の遺跡が73ヵ所存在する。昭和55年度の工事対象地区は北能代I区であり、このI区には、杉沢台・竹生・街道上の3遺跡が存在する。

杉沢台遺跡は、昨年の範囲確認調査で遺跡の広さが35,000m²程であることが確認された。このうち、当工事で4,400m²程遺跡が破壊される(工法で対応できない)ため、この部分の記録保存をはかることを目的に、発掘調査されることになった。

2. 調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会		
調査期間	昭和55年4月14日～同年10月3日		
調査地	秋田県能代市磐宇杉沢台		
発掘面積	4,672 m ²		
調査員	永瀬 福男	秋田県教育庁文化課	社会教育主事
	熊谷 太郎	"	文化財主事
補佐員	大高 博康		
補助員	佐々木金正		
事務局	秋田県教育庁文化課		
調査協力機関	東北農政局能代開拓建設事業所		
	能代市教育委員会		
	秋田県能代土地改良区		
調査協力機関	小土部落会		

第2章 遺跡の立地

杉沢台遺跡は、東経 $140^{\circ}03'$ — $140^{\circ}04'$ ・北緯 $40^{\circ}15'$ — $40^{\circ}16'$ に位置する。

遺跡の北を遠望すると、青森県との県境をなす白神山地が東西に横走する。西方の日本海までの距離は、約3.3kmである。南方の米代川までの距離は約6kmである。

米代川の北には、約3,000haの広大な東雲大地が広がる。この台地は段丘群によって構成されている。遺跡は東雲台地の北縁に位置し、標高約35mを測る。沖積地との比高は約25mである。

遺跡の北側の沖積地には竹生川が流れ、日本海に注ぐ。また、東側には小沢があり、良質の湧水が流れている。

第3章 発掘調査の概要

1. 遺跡の概観

昭和54年10月22日～11月1日の範囲確認調査（秋田県教育府文化課実施）で、遺跡の範囲は約35,000m²であることが確認されている。

この遺跡は、東雲台地の北縁に位置する。

東雲台地は段丘群（白石・工藤ほか1,977）によって構成され、当遺跡は中位段丘に位置する。また、この中位段丘は、遺跡と周辺では2段になっている。上位は標高約35m、下位は約32mである。発掘調査区域は、標高約35mの上位の段丘面と下位の段丘面に移行する斜面である。標高約35mの段丘面は、南方約6kmにある米代川まで続いている。標高約32mの段丘面は狭く、北に約20mで急斜面になり、沖積地に至る。沖積地の標高は約11mである。

遺跡の東側には、小谷が入り込む。この小谷には、現在でも、良質で水量の豊富な湧泉がある。

遺跡下の沖積地には竹生川が流れ、日本海に注ぐ。

遺跡の現況は、畑地と水田である。水田部分は遺跡の南側の平坦地であるが、水田造成のさい、地山の上部を削っているため、遺構の一部の壁が破壊されていた。

当遺跡の地層は、I層が黒褐色土層（20～30cm）、II層が暗褐色土層（10～20cm）、III層がローム層（1～1.2m）であり、この下はローム層+砂層、砂層、礫層へと続く。



第2図 遺跡の地形と発掘調査区

2. 調査の方法

発掘調査は、グリッド方式を採用した。グリッドの規模は4m×4m、グリッドの南北方向は磁北方向に一致する。グリッドの名称は、南北にアルファベット、東西に算用数字を用い、これらの組合せで表現した。

遺構の実測は、造り方測量で実施した。

遺構の記号は下記のとおりである。

S I…竪穴住居跡、S K I…竪穴状遺構、S K…土壙、S K F…フラスコ状ピット、S D…溝、そして、発見順にS K01、S K02…のように通し番号を付した。

その他の略記号は、R W…土器、S…石

3. 調査の経過

調査期間は昭和55年4月14日～同年10月3日である。

4月14日の午前中は、小土公民館において、作業員との打合せ会。調査の目的、発掘の仕方（スライド使用）、勤務時間、賃金の支払い、諸注意等を話合う。午後は遺物の表面採集・グリッドのテープ張り、カヤその他の雑草の下刈り、発掘用具置き場の設置などの調査の諸準備15日、表土除去作業を開始。西側から東側に調査を進めることとし、表土除去作業を開始。西側には水田が一部あったが、転作作物が植えられていたため、7月以降に調査することとした。アゼを残しながら第I層を除去すると歴史時代の土壙・溝・竪穴住居跡が確認。23日、縄文時代前期、晩期の土器・石器も検出されるようになる。25日、歴史時代の住居跡・溝・土壙の精査を始める。全体の表土除去作業を終了させ、遺構の重複関係を把握してから精査にとりかかるべきであるが、遺構確認面を長期間放置しておくと、乾燥による地割れ、埋土層の堅固化が進むため精査を開始した。

5月1日、S I 01の精査でカマド付近に多量の土師器杯が検出。2日、S I 02と重複しているフラスコ状ピットの精査開始。7日、長軸が15m以上もある遺構（S I 06）らしきものの確認。地面が凹んだ自然地形なのか、それとも遺構なのか、判断に迷いながら8日に精査。中軸線上で地床炉確認。大型住居跡であることが判明。

5月中旬になると縄文時代前期の小型・中型住居跡も数棟精査終了。調査は標高35mラインに沿って東方に進行し、調査予定区域のはば中央部で、梢円形に近い環状溝を確認、精査開始。調査予定地の西半分の精査は終了。しかし、S I 06大型住居跡の北側は、東西約30m、南北約9mにわたって地山が出現しない。もしかしたら、30mを越す超大型住居跡ではないかという期待が持たれはじめる。そして、歴史時代の溝であるS D 11・14・16の精査過程で、床

面・壁の一部を確認したため、30mを越える大型住居跡である確信を持った。21日、S I 07として精査を開始。

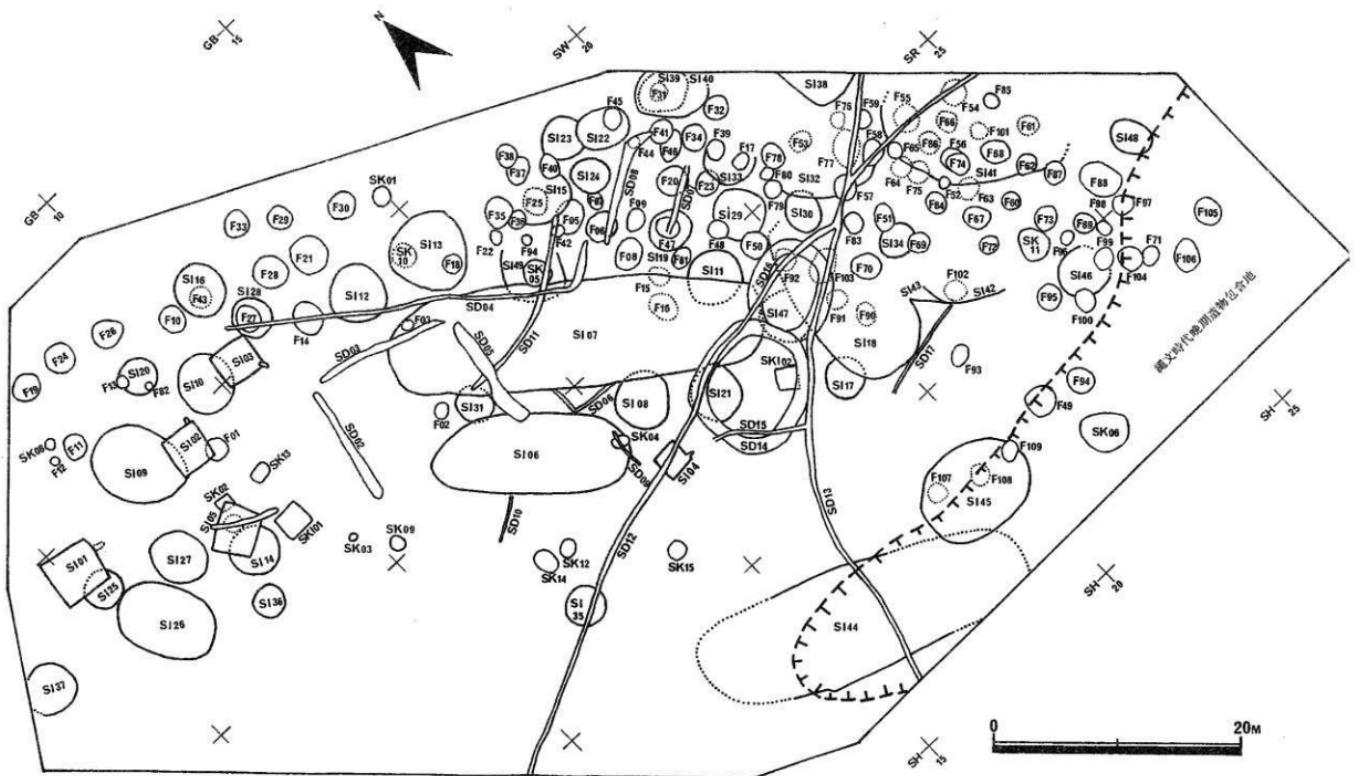
5月末になると、発掘区の西側の北斜面にフラスコ状ビットが群集することが判明した。そして、このフラスコ状ビット群は、標高35mラインの北側斜面に広く分布することが予想されたため、斜面の表土除去作業を開始。30日、SK F08の精査、埋土層中から土器とともに、貝層（ヤマトシジミ中心）が検出される。

6月3日、竹生小学校児童来跡。5日、SK F18の精査で縄文時代後期の深鉢型土器（完形品）が床面に倒立した状態で検出。今後、後期の遺構も検出されることが予想される。6月末まで北側斜面と東側の表土除去作業が継続。

7月中旬までに、竪穴住居跡33棟、フラスコ状ビット70基を確認し、精査を継続。10日、遺構の平面実測のための遣り方測量の杭打ちを開始。また、水田部分の転作作物の検査が終了したため、南側の表土除去作業も開始。21日、高校生・大学生が調査に参加。遺構の実測を担当してもらう。23日、竹生遺跡の調査開始。30日、大潟村公民館一行来跡。

8月4日、能代市中央公民館チビッ子教室一行来跡。由利高校生21名、6日までの予定で調査に参加。調査区南東隅に分布する縄文時代晩期の遺物包含層の精査開始。5日、能代市東部公民館チビッ子教室一行来跡。8日、秋田県立博物館教室一行来跡。8月末までに、竪穴住居跡40棟、フラスコ状ビット84基、土壙15基、溝13条、竪穴状遺構2棟検出。

9月2日、向能代小学校4年生来跡。5日、晩期の遺物出土状況の記録終了、遺物の取り上げ開始。6日、遺跡の保存問題について小土部落会・農政局・文化課の話し合いを現場事務所を行う。12日、保存についての再度の話し合いを持ち、農政局・地権者・文化課参加。保存は困難であるという意見が多い。9月中旬までに北側斜面のフラスコ状ビットは100基近くになる。SK F98・99からも貝層が検出され、貝層出土のフラスコ状ビットは全部で6基となる。9月中旬からは、フラスコ状ビットの精査と遺構の実測に全力投入。24日、古池裕子氏（東大総合資料研究所）貝のサンプリングのため来跡。27日、午後1時から発掘調査を一般公開。26日で遺構の精査をほぼ終了し、10月3日までは、遺構の実測と写真撮影のほか、発掘器材の撤去作業。



第3回 地質構造図

第4章 調査の記録

1. 繩文時代前期

① 壇穴住居跡

44軒の壇穴住居跡が検出された。これらの住居跡はその規模から大型・中型・小型に3分類される。

大型住居跡は4軒検出され、外プランは小判形を呈し、床面は2段構造である。柱穴はベンチ状床面と土間状床面の段境にあり、中軸線に対象的に配置されている。炉は地床炉であり、長軸線上に数ヵ所存在する。それぞれの外プランの規模は、S I 07が長軸推定約31m（30mまでは確認できる）・短軸約8.8m、S I 44が長軸推定約28m・短軸9m、S I 06は長軸約16m・短軸約6.6m、S I 18が長軸15m・短軸約7mである。なお、S I 07の面積は222m²である。

中型の住居跡（S I 09・26・32・41・45）は、長軸8～13m程の橢円形を呈する。S I 09を除き、床面が2段構造である点や、炉・柱穴の配置など大型住居跡と類似する。S I 09は狭いベンチ状床面を持ち、炉は埋葬炉である。

小型の住居跡は、径2.5～5m程の円形プランを呈する。炉は使用度が低かったのか判然としない。柱穴の配置・本数には大型・中型住居跡とは異なり、規格性に乏しい。

② フラスコ状ビット

フラスコ状ビットは、口縁部が狭く、胴部の広い典型的なフラスコ状を示すものと、口縁部が広く、底部に溝を有するものの2種類存在する。これらフラスコ状ビットのうち、土器のほか貝類を投げ捨てたものが6基検出された。フラスコ状ビットが廃棄され、凹地になったところを捨て場として再利用したと考えられる。貝の種類はヤマトシジミ・カワシンジュガイ・カワニナ・オオクニシ・ハマグリであり、ヤマトシジミが圧倒的に多い。

2. 繩文時代後期

後期に属する遺構は、フラスコ状ビット1基のみである。このフラスコ状ビットからは、深鉢形土器の完形品が倒立した状態で検出された。住居跡は、今回の調査では検出されなかった。

3. 繩文時代晚期

発掘調査区の南東に晚期の遺物包含層があり、多数の遺物が検出された。遺物は土製品（土器・土偶など）・石製品（岩偶・石棒・石鏡・石匙・石鍬など）である。遺構は土塙（風倒木

痕の可能性もある) 1基のみであり、住居跡は検出されなかった。

4. 平安時代

① 穴住居跡

5軒検出された。1辺2.5~4m程の方形プランを呈する。カマドは東か西側の壁に構築されている。S105のカマドは保存状態がよく、袖部に石を置き周辺を粘土で構築している。S101には「間切り」と考えられる柱穴があり、床面も2段になっている。

② 穴状遺構

2軒検出された。1辺約2mの方形を呈し、カマドは付設されていない。作業小屋として使用されたものと考えられる。

③ 溝状遺構

10数条の溝が検出された。このうち、SD14とSD16が注目される。SD14とSD16は重複しているが、SD16が古い。いずれも、幅約180cm・底面幅約70cm・深さ約70cmで、断面は逆台形を呈する周溝である。周溝のプランは橢円形であり、SD14の長軸約10m・短軸約9m、SD16の長軸約8m・短軸約6.5mを測る。

第5章 まとめ

縄文時代前期の遺構は、前述のとおり穴住居跡とフ拉斯コ状ピットである。これら遺構は、台地の縁から北側の斜面で検出され、台地縁から南に離れると検出されなかった。したがって、前期の集落は台地縁に沿って形成されていたものと考えられる。

大型穴住居跡の検出された位置は、この台地縁のなかで最も標高の高いところである。そして、遺構の分布と地形から考えて、集落の中心にあたる場所であると理解される。

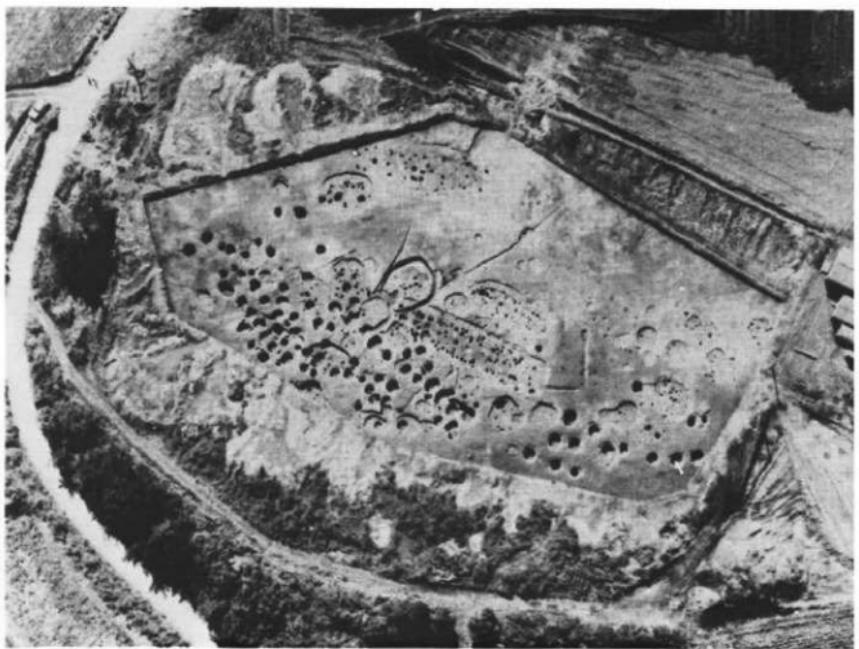
中型・小型の住居跡は、台地縁と北側斜面に、フ拉斯コ状ピットは北側斜面に分布する。

近年、各地で大型穴住居跡の資料が増加してきた。資料の多くは中期以降のものであるが、杉沢台遺跡の大型住居跡は前期に属する。縄文時代前期のイメージを大きく変えなければならないだろう。大型住居を作る作業には多人数を要したはずであり、その労働量は膨大であったと考えられる。

なぜ、このような大型の施設を必要としたのだろうか。この施設の性格を考えることは、縄文時代の社会構造を考えることであると思われる。それゆえに貴重な資料であると考えられる。

プラスコ状ビット内に捨てられていた貝類は、縄文時代前期の環境を知る手掛りを与えてくれるものと考えられる。ヤマトシジミを主体とする貝類は、遺跡下で採取されたものと考えられ、縄文海進は杉沢台遺跡の近くまで及んでいたことが理解される。

以上のように杉沢台遺跡は複合遺跡であるが、なかでも縄文時代前期の集落の様子がかなり把握できる。とりわけ、超大型住居跡の検出は、縄文世界を考える上で看過できない資料となるであろう。



図版1 発掘調査全景（航空写真）



図版2 (1) 発掘調査前 (2) 発掘風景

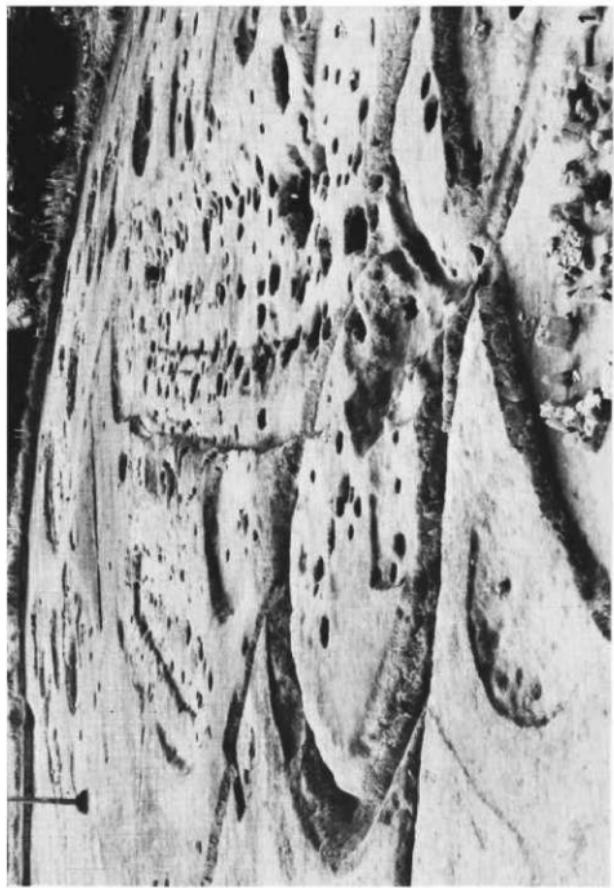
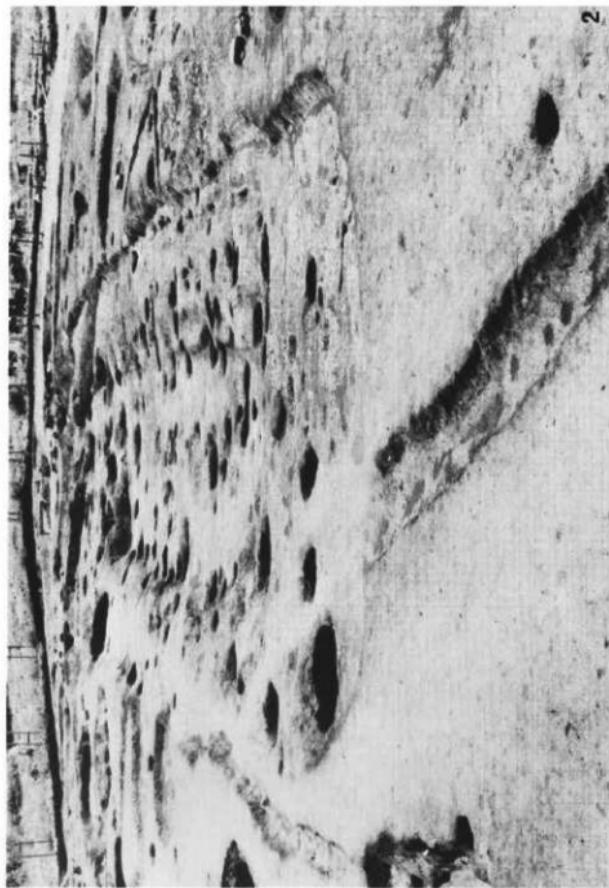


図版3 (1) 調査区西側（南▶北） (2) 調査区西側（西▶東）



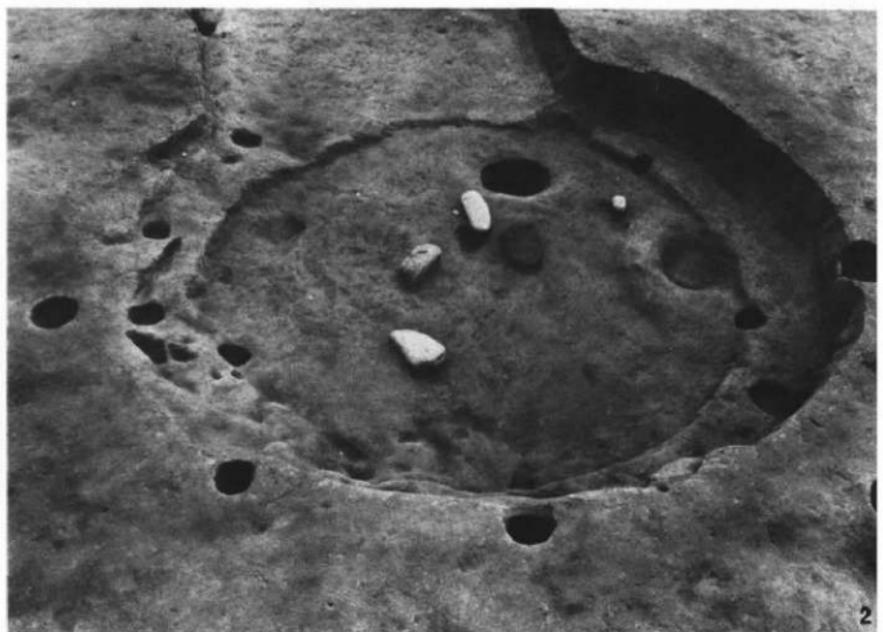
図版4 (1), (2) 北側斜面のフラスコ状ピット群 (西▶東)

図版 5 (1) SI 07 (西▶東) (2) SI 07 (東▶西)





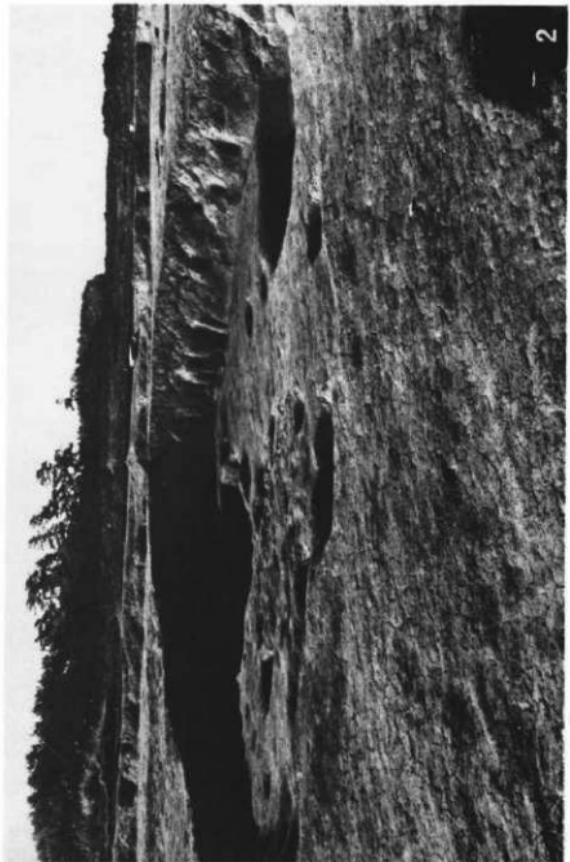
図版6 (1) SI 06 (東▶西) (2) SI 08 (北▶南)



図版7 (1) SI 09 (南▶北) (2) SI 10 (西▶東)

2

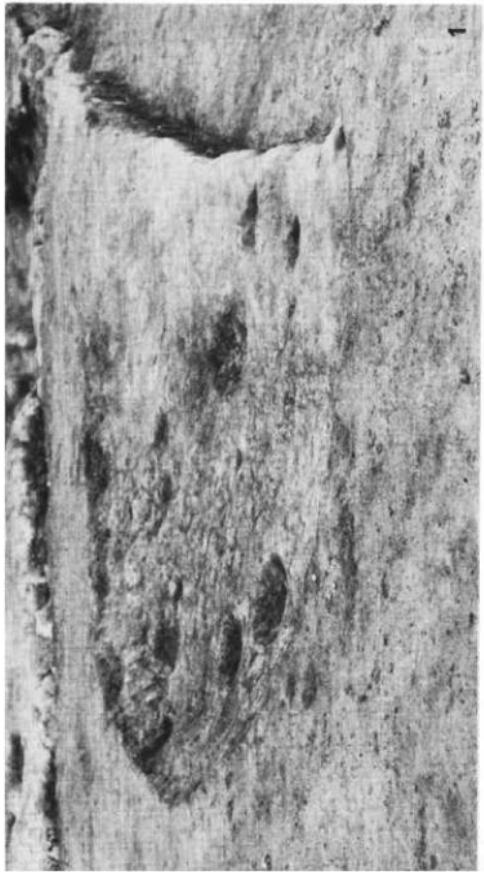
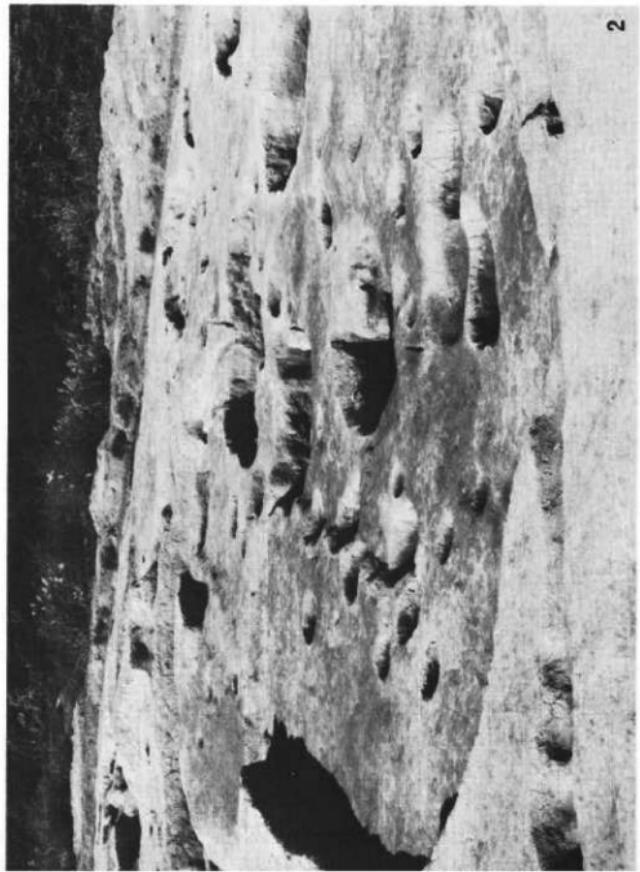
圖版 8 (1) SI 12 (北►南) (2) SI 13 (北►南)





図版 9 (1) SI 14 (南▶北) (2) SI 15 (南▶北)

圖版 10 (1) SI 17 (南►北) (2) SI 18 (南►北)



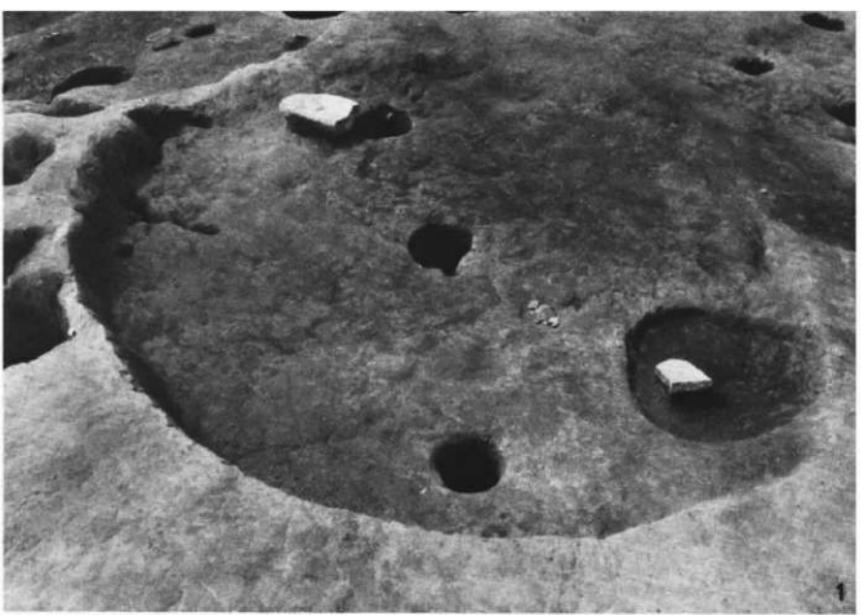


図版II (1) SI 20 (北▶南) (2) SI 22, SKF 45 (北▶南)
SKF 13, 82

圖版12

(1) SI 22 (北►南) (2) SI 23 (北►南)

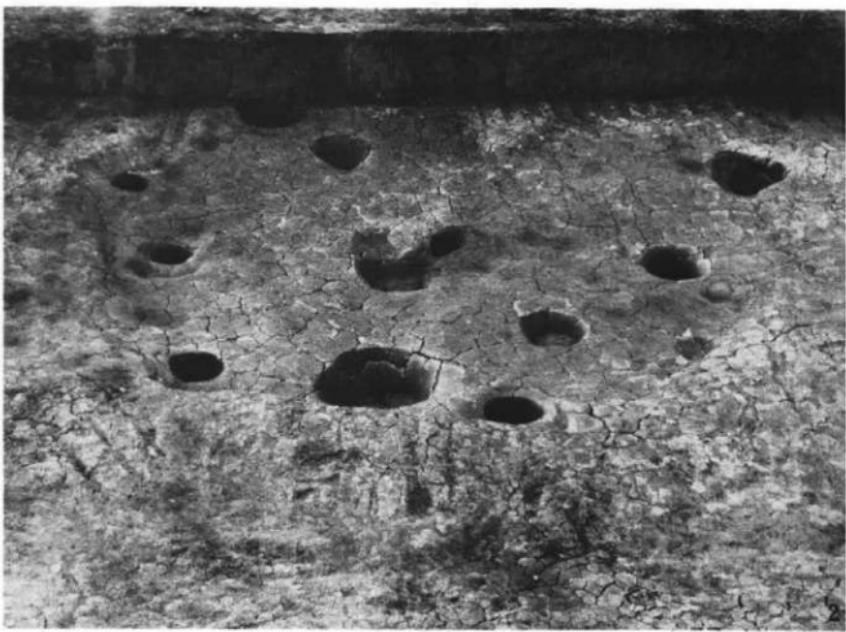




図版13 (1) SI 24 (東▶西) (2) SI 26 (東▶西)

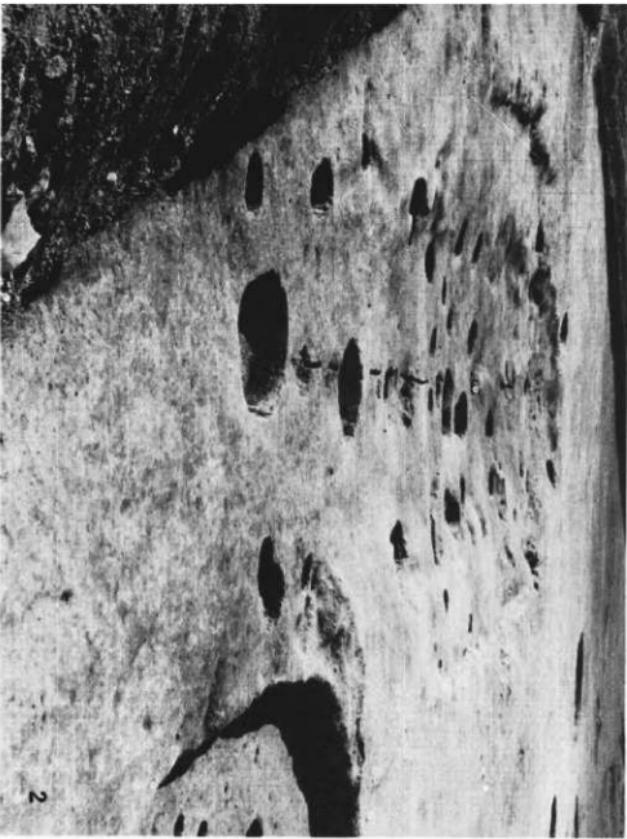


図版14 (1)SI 27 (東▶西) (2) SI 34, SKF 51, 69 (南▶北)



圖版15 (1) SI 36 (南►北) (2) SI 37 (東►西)

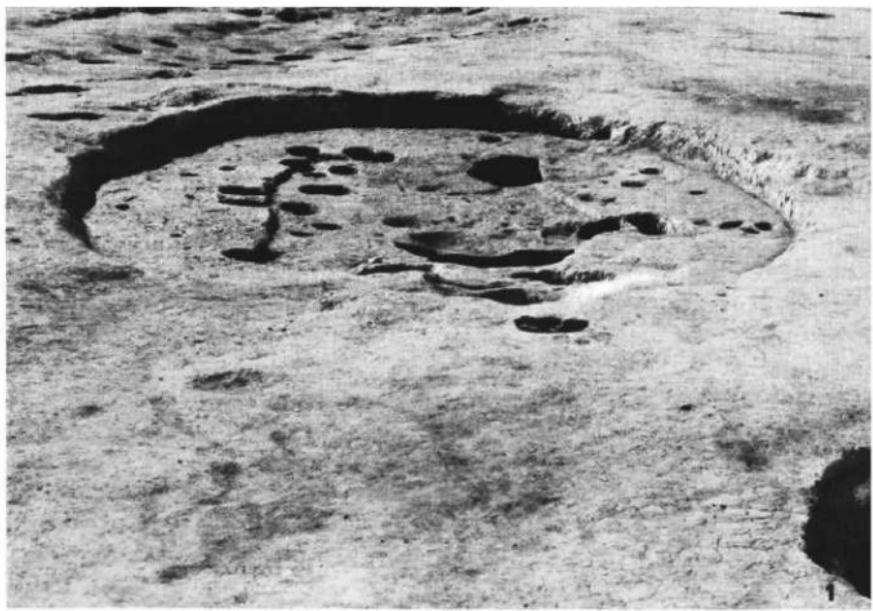
圖版16 (1) SI 39, 40 (北►南) (2) SI 44 (東►西)



2



1



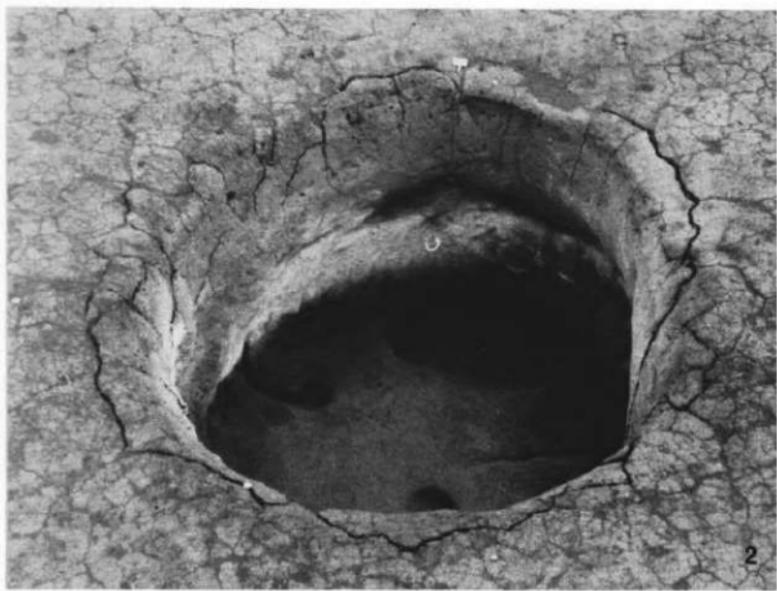
図版17 (1) SI 45 (西▶東) (2) SI 48 (東▶西)



図版18 (1) SKF 01 (2) SKF 06



1



2

図版19 (1) SKF 08 (2) SKF 14



1

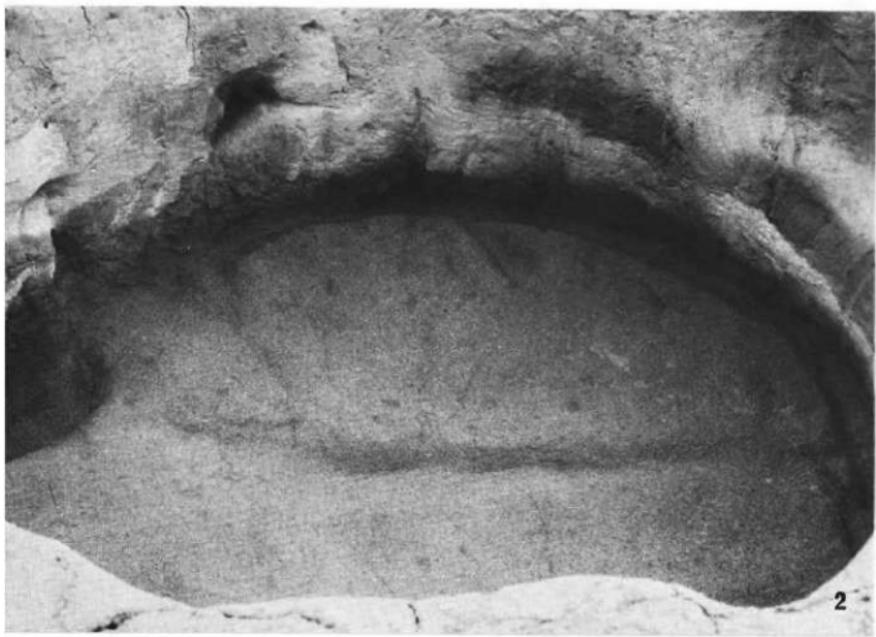


2

図版20 (1) SKF 20 (2) 同貝層



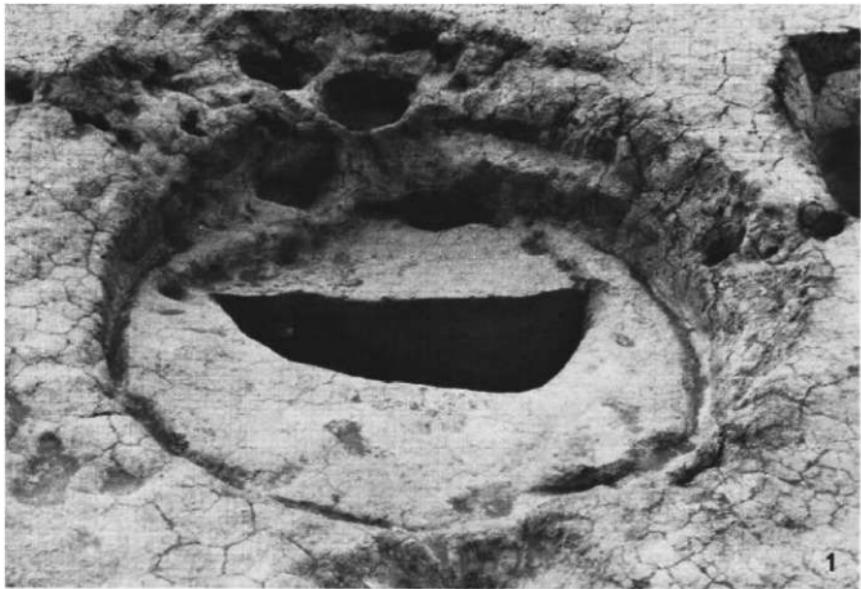
図版21 (1) SKF 21 (2) SKF 22



図版22 (1) SKF 27, SI 26 (2) SKF 27



図版23 (1) SKF 28 (2) SKF 29

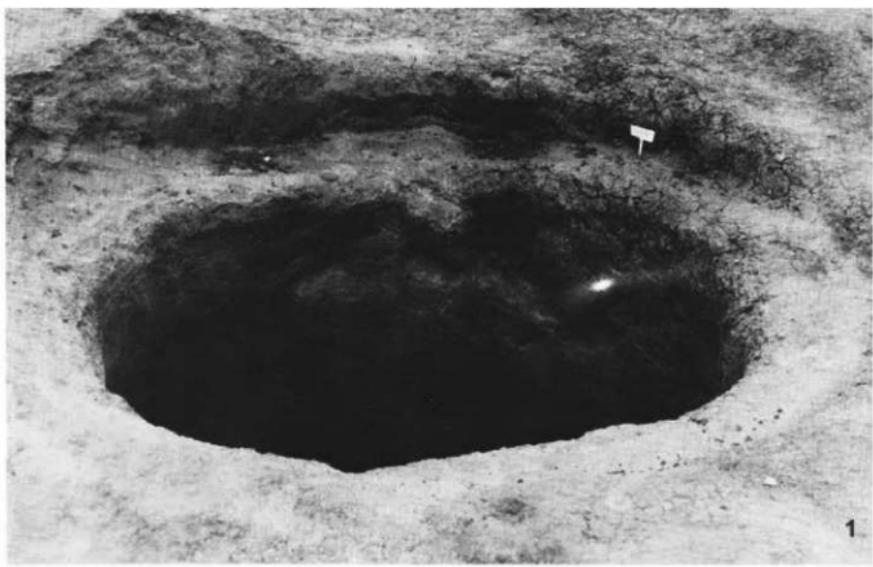


1



2

図版24 (1) SKF 43 (2) SKF 83



図版25 (1) SKF 95 (2) SKF 98



1



2



3

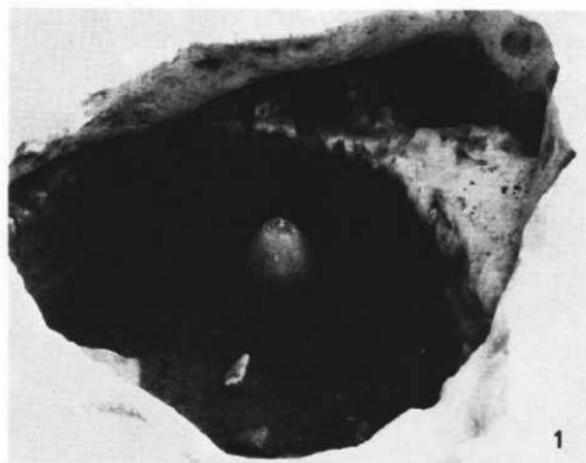


4

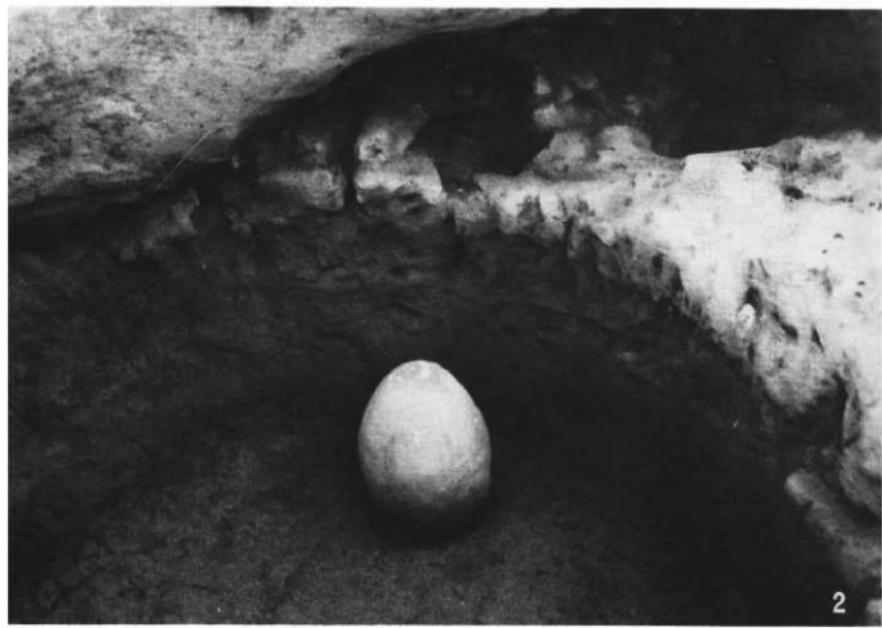
図版26 縄文時代前期の土器 (1)



図版27 縄文時代前期の土器 (2)

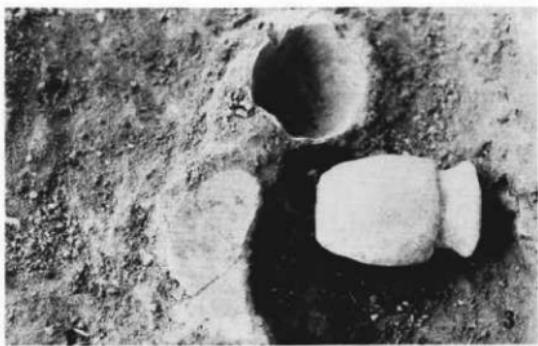


1



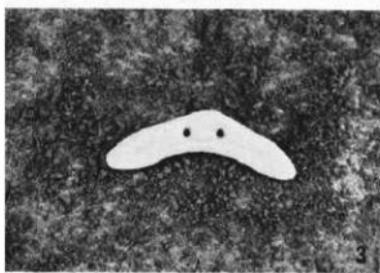
2

図版28 (1) SKF 18 (2) SKF18の土器 (縄文時代後期
出土状態

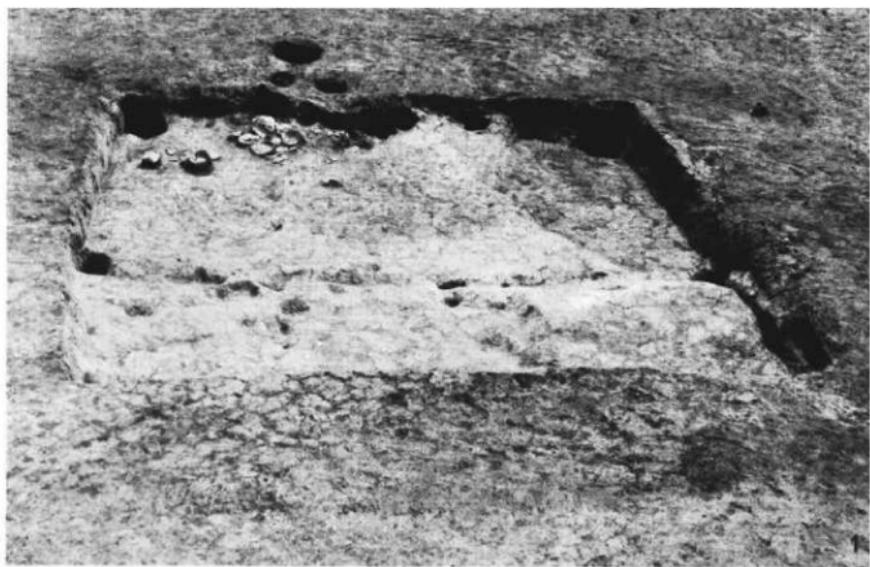


図版29

縄文時代晚期の
土器出土状態



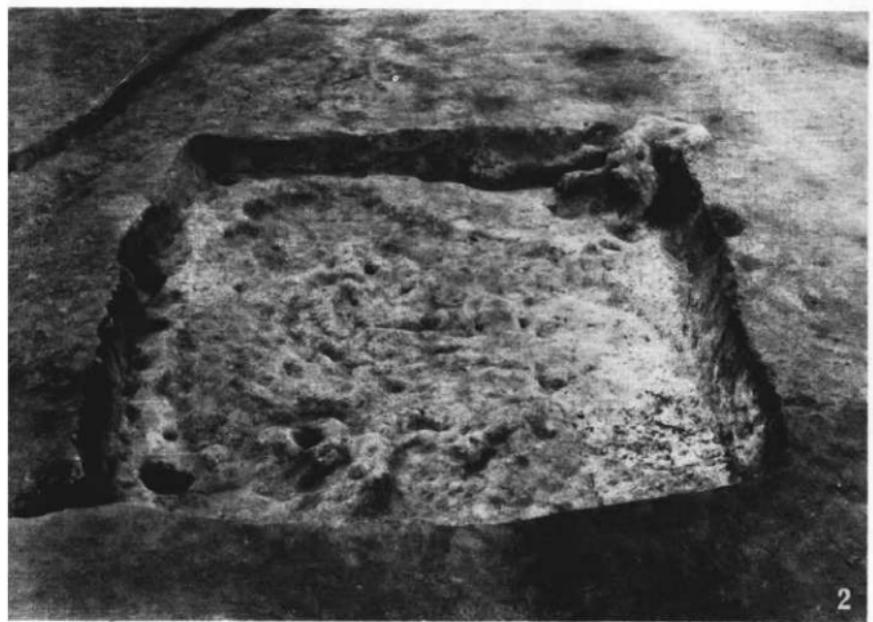
図版30 (1)~(9) 繩文時代晚期の土製品・石製品の出土状態



図版31 (1) SI 01 (西▶東) (2) SI 01 カマド付近の
土師器出土状態

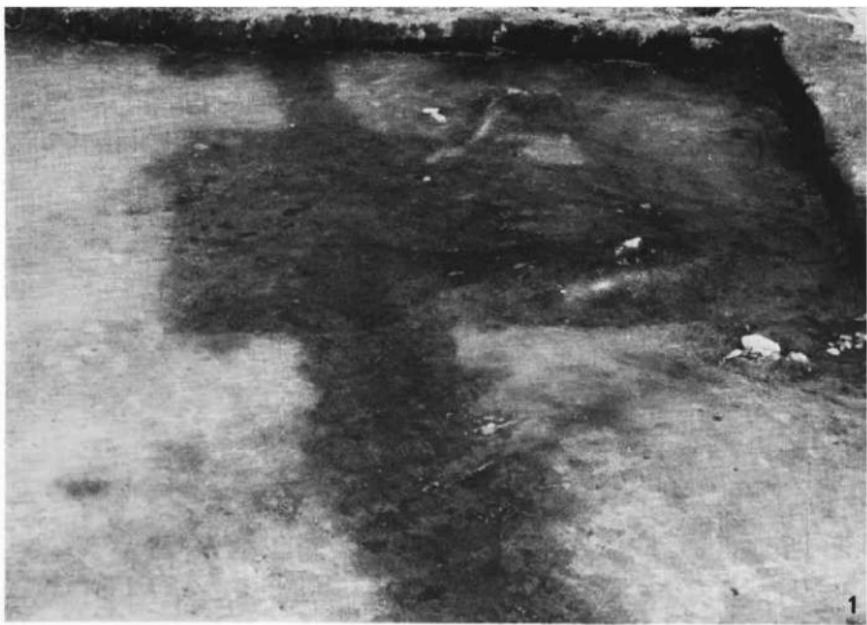


1



2

図版32 (1) SI 02 (南▶北) (2) SI 03 (西▶東)



1



2

図版33 (1) SI 05 (2) SI 05 (西▶東)
SD 12 の確認面



図版34 (1) SD 03, 04 (西►東)
(2) SD 14, 16 (南►北)

V. 竹生遺跡

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

当地域は、国営能代開拓建設事業の対象区となっているが、導水路工事計画が具体化したため、記録保存を目的に事前調査したものである。

2. 調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会
調査期間	昭和55年7月23日～8月30日
調査地	秋田県能代市竹生字竹生
発掘面積	2,000m ²
調査協力機関	東北農政局能代開拓建設事業所

第2章 遺跡の立地と環境

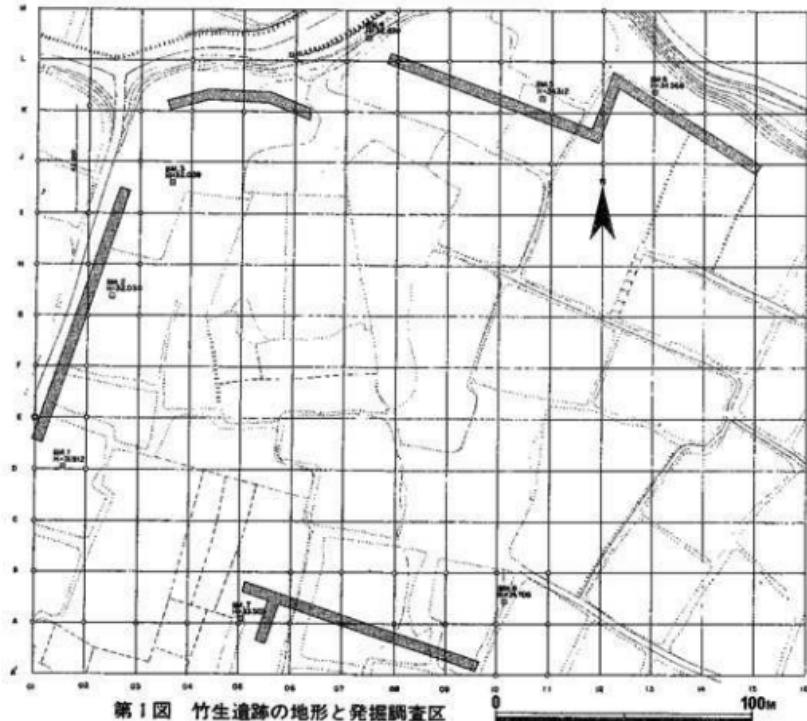
本遺跡は、昭和54年度に秋田県教育委員会が実施した、国営能代開拓建設事業関係遺跡分布調査により、面積約53,000m²と確認されている。

遺跡は南に広がる台地の北縁部に位置し、標高約30m。西方は約2km先に日本海を望み、隣接して掘られている。最も大きい土壙は、その號面を掘りくばんでカマドを構築しており、小鐵治作業における槌打場、火床と思われる。出土土器は、土師器・須恵器。年代は平安時代と思われる。

第3章 調査の記録

土壤

41基検出。直徑1m～1m50cmで、平面プランは円形もしくは橢円形を呈し、浅く掘られているものが多い。しかし埋土状況は、焼土を多量に含むものと、比較的少ないものがある。前



第1図 竹生遺跡の地形と発掘調査区

者中 S K 31は、焼土と共に多量の鐵滓、及び羽口も出土しており、鍛冶場と考えられる。出土土器は、土師器・須恵器。年代は平安時代と思われる。

溝

21基検出。底面は皿状を呈するものが多く、かつ大半は20~35cmと浅い。出土土器は、土師器・須恵器である。年代は平安時代が主体となろう。

カマド状遺構

17基検出。一部を除き、遺構に伴う事なく単体で検出。S X F 04は比較的保存状態が良い。カマドは煙道部を持たず、残存する側壁は熱化により内外面共赤褐色を呈す。燃焼部内、埋土下層には黒斑現象のみられない赤褐色の土師器を有す。この事から本遺構は、土師器焼成が主と思われる。

南方約4kmには米代川が位置する。台地上には多くの遺跡が散在し、周辺の主なものとして、西側に杉沢台遺跡（縄文）、南西に落合遺跡（縄文）等がある。

遺跡の地層は、1層~3層に分かれ、暗褐色土を主体とする。4層はローム層である。

豊穴住居址

1基検出。平面プランはほぼ円形を呈し、中央に地床炉を付設する。年代は縄文時代であるが、出土土器は磨耗が激しく時期はうかがえない。

豊穴状造構

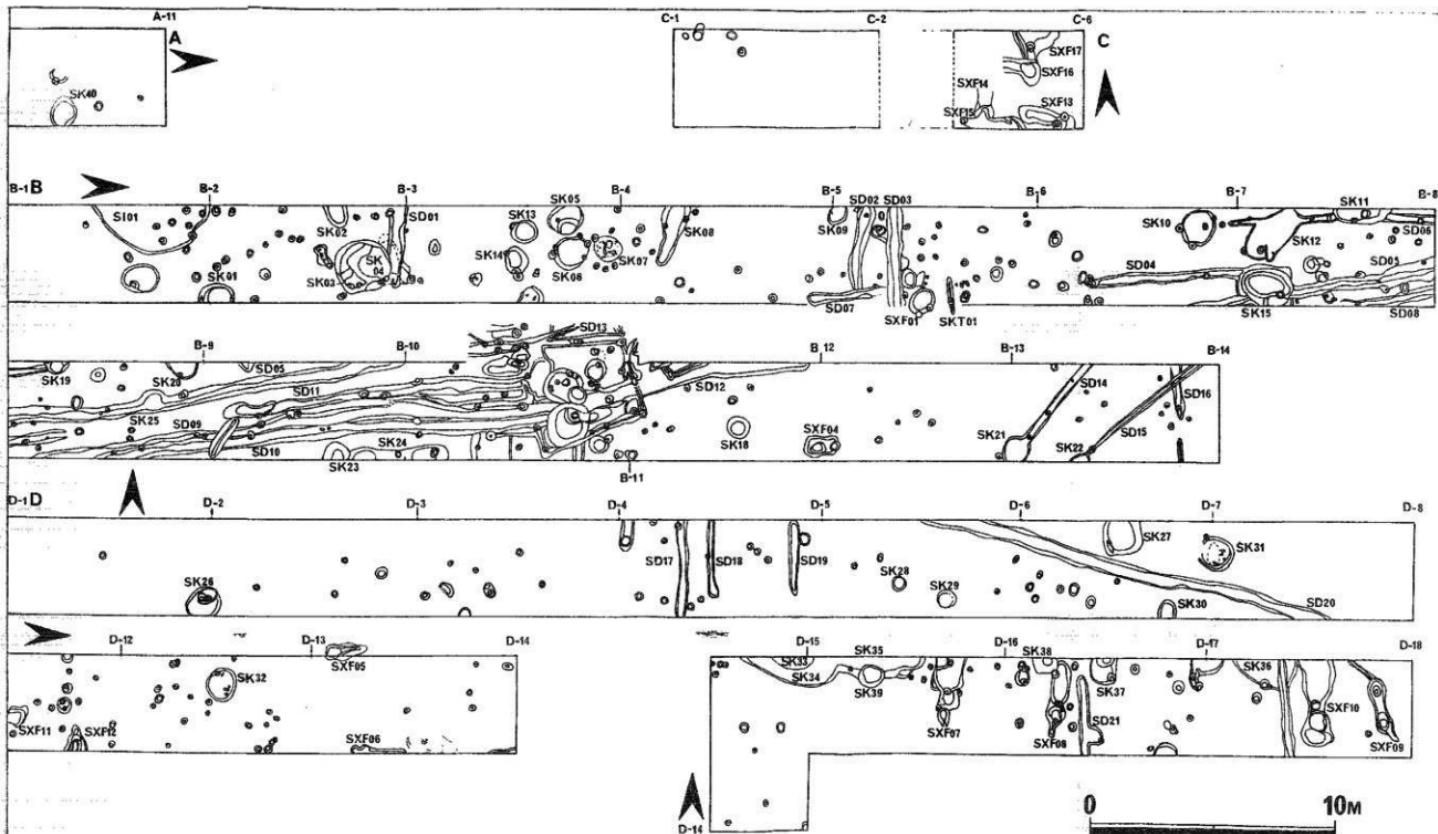
平面プランは、1辺が480cmの方形を呈し、南寄りにカマドを持つ。遺構内部には3基の土壙と、土壙に付属する1基のカマド、及び小規模な製鉄炉、鉄滓ビットを備えている。製鉄炉はその形態上から、ポールがと思われ、上部構造は崩壊し残存しないが、周囲に多量のスサ入り粘土を検出する。付属するビットには鉄滓が充満し、その多くは精練滓である。土壙は3基。

出土遺物

遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、土錐、羽口、土製脚柱部、鋸先、釘である。土師器は杯の場合、無調整で回転糸切りによる。

第4章 まとめ

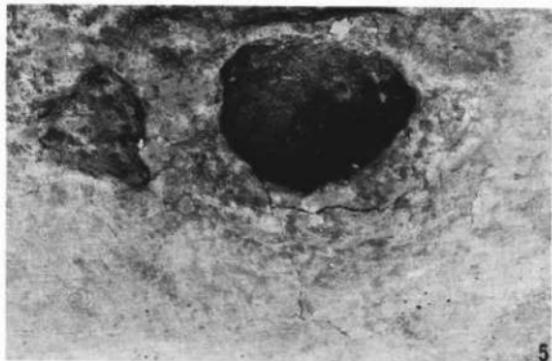
年代は、出土遺物等から平安時代、10世紀後半を中心とした時代と考える。遺跡の性格としては、生産を主体としたものと思われる。特にSK101において、小規模ながら製鉄がおこなわれ、同時に小鍛冶もなされていた事は、同時代、地方における鉄製品の生産過程を知る上で、考えるべき事を含んでいる。



第2図 竹道遺跡分布図



國版 1 (1) 造跡調査前 (西▶東) (2) 竪穴状遺構 (製鉄、鍛冶遺構) SK101 (西▶東)
(3) 竪穴状遺構内、製鉄炉、鉄滓ビット (西▶東)



図版 2 (5) 土壙SK31(西▶東) (6) カマド状遺構SKF04(北▶南)

(7) 鉄鋤先出土状況